商業美術教本

入門用
解說

田增治著

納本

特232
494

東京 冨山房 神田

始

特232
494

商業美術教本

入門用 解說

濱田增治著

東京 冨山房

序

商業美術の創作を行ふに當つては凡そ五つの楷梯を必要とする。卽ちその最初は從來の圖畫道の修業であり、その二は圖案法の修得であつて、この二つの基礎技術の習練をして、第三にしてはじめて商業美術の創作に入ることが出來る。しかし更にその創作物が實用に供され實際的なるためには、少くとも印刷、塗裝工作、照明、裝飾等の技法、設計術、寫眞術等を知つてゐなければならないのである。その上に商業美術の眞の意義を悟り廣告の理論、廣告術の詳細、販賣、經營等の理論等を知ることが必要である。

故に商業美術を完全に教育せんとするならば、實業學校五ヶ年に亙つてこれを課するのが理想的であるが、若しこれが時間配當のその他の關係で實施出來ないならば、先づ現行の圖畫科の課程に多少改良を加へてこれを商業美術の入門的に取扱ふことが適當である。卽ちこれさへ施して置くこ

とが出來たならば、圖畫の技術に長ずると共に、圖案の要領も會得出來、商業美術の表現技術も大體知ることが出來るのである。故に圖畫科が一二年しか課せられてゐない學校では先づこの入門用によつて生徒を商業美術的に導くべく、又別に商業美術科の設けてある學校では低學年にこの入門用を課して、次第に上卷・下卷・上級用と順を追ふてその五楷梯を終ることが最も賢明な方法である。

たゞ五楷梯を終るとするには、專門の商業美術教師でない限りこれを圖畫科の教師のみに委ねることはむづかしく、さればとて、最初の表現描畫の多い入門篇を商業實踐の教師によつて扱ふこともむづかしい故、その連絡は適當に按配しなければならないのである。

しかし大體この入門用は主として圖畫科の教師の方に取扱はるべきものである。

目次

商業美術教本入門用教材配當と學習順序……一

商業美術教本入門用解說

用具の解說（一、用具の知識）……一
色の知識（二、色の名稱と混色）……八
彩色法（三、彩色の練習）……一〇
見取寫生（四、寫生 その一）……一五
線畫の寫生（五、寫生 その二）……一七
ふりかけ圖法（六、ふりかけ圖法）……一九
圓壔形の寫生（七、寫生 その三）……二〇
適合（八、文字の適合）……二一
日本畫の習作寫生（九、寫生 その四）……二四
シルエット（一〇、影繪）……二五
丸い物の寫生（一一、寫生 その五）……二六
略畫（一二、略畫の描き方）……二八
圖案（一三、應用圖案 その一）……二九
圖案の模樣（一四、適合圖案）……三一
圖案の應用（一五、應用圖案 その二）……三三
ポスター（一六、應用圖案 その三）……三四
引札（一七、應用圖案 その四）……三八
年賀用繪葉書と木版畫（一八、應用圖案 その五）……四三
文字の圖案（一九、文字の圖案）……四七
包裝容器（二〇、應用圖案 その六）……五〇
包紙と看板圖案（二一、應用圖案 その七）……五〇

日　次

マッチレッテル（三、應用圖案　その八）…五二
ペン畫（三三、ペン畫）……五三
ハーフトーンの繪畫
（三四、ペン畫とその應用）……五四
立體構成（三五、組立と組合せ）……五五
構圖の構成（三六、構圖の取り方）……五八
繪の見方（三七、繪の見方）……五九

商業美術教本入門用教材配當と學習順序

第一學期

目的　先づ圖畫を學ぶために必要な用具・用材の取扱を覺えさせること、各種の表現・描畫の方法のあること、色彩に於ける簡單な知識を得ること、物を表現するには如何なる觀察をして作畫をしなければならぬかといふこと等を教へることが主眼である。

(1)　用具の知識

教本所載の用具の寫眞によつてその種類と取扱ひ方を說明する。

(2)　色の名稱と混色

學習のはじめに當つて、色の名稱を教へて置くことは大切である。色の名稱は多種多樣であるけれども、普通用ひる名稱、繪具屋にて、繪具を買はうとする際に必要な程度の名稱は洋名・日本名について教へて置くことは無駄でない。

そして簡單な混色の方法と、その混色によつて生ずる間色の名稱等も教へて置く。

出來得れば、原色・間色・再間色の字義についても説明を加へて置くとよい。しかし色彩に關して餘りむづかしい講義はこの際必要はない。

それよりもポスターカラーの取扱方を懇切に教へ、實際に實驗して、生徒にもこれを試みさせる。即ち簡單な圓若しくは正方形を描かせて、その中に塗彩せしめ、塗り方の手際について見ることが大切である。そして更に原色と原色との混色を作らせ、或は原色と白色若しくは黑色とを混合せしめて、色の明るさ或は暗さを試して見るのも必要である。

要するにこの時間に於ては、繪具に慣れさせることが主眼である。

(3) 彩色の練習

ポスターカラーの塗り方が完全であるならば、更にこれをいろ〳〵なものに塗つて試して見ることが必要である。それについては、方眼の目盛をした畫用紙を用ひる。これは、その一劃一劃を塗つても種々の模樣が出來るし、その各方眼に劃せる各劃を任意に塗彩することによつて、意外の美しい模樣を現出する故、一は塗彩の練習を兼ねると共に、一つは自然に圖案美の面白さを體得せしめるために課するのである。即ち工夫によつて種々の模樣の美しさを得ることは、圖案に對する興味が生ずる基であつて、且つ一彩毎に綿密叮嚀に塗らなければ好結果を得られぬこの仕事は、自然に生徒をして綿密叮嚀な訓練に慣れさせることになる。粗奔な生徒は、かゝる仕事

を厭ふかも知れぬが、すこぶるやさしくて、自然に美しい模樣の得られることは、その興味によつて幾分でもその性行を改めることが出來よう。

また、この仕事は後に商業美術の實際に望む場合に、自己を制御し、自己の綿密さ叮嚀さを強制する場合によい基礎となる。故にこの仕事は二枚三枚と描かせてもよいのである。

(4) 寫生　その一——函の寫生

方眼紙の塗彩が小手先の技術の習練であるとしたならば、この函の寫生は、觀察を基礎とした描畫の技術を與へるものである。

即ち、ここに一個の函が置かれてあるといふ事實に對して、その函を見る人間が、如何なる位置からそれを見、且つその函は現在如何なる狀態にあるかといふことを看取せしめて、それを別の一平面上に描き現はさせようとするのである。故にこの練習は前の方眼紙の塗彩に比べては非常にむづかしく、畫者は、非常な智力を働かせねばならぬこととなるのである。それについては、先づ遠近法といふものを知ること、眼の位置と物の位置との角度の問題が重大になるのである。そのことは教本にも解說してあるが、教師である人は、この點について十分に注意を促す必要がある。物の置かれてゐる狀態が看取されたならば、次はその物に於ける立體感を知るための、陰影の調子を見ることが大切である。ここでは最も簡單な明暗二相を知るに足るだけの角型の函を

以てしてあるために、生徒にも左程むづかしいものではないと思ふが、いはゆる輝いてゐる部分と、暗いところの區別を十分に觀察せしめて、それを描き現はさしめることが大切である。

この描畫は以上の故に、圖は簡單としても將來いろ〳〵なものを寫生する上に必須な心得を體得せしめるものである。

(5) 寫生　その二——櫻の小枝(淡彩畫)

寫生にもいろ〳〵な態度がある。洋風畫の寫生では、自己の位置を動かさず、對物の位置も動かさずして、すべて見たまゝを看取し、これを表現するのであるが、日本畫の或る場合(主として下圖作製準備の場合)、圖案の下圖を要する場合等の寫生は、時にその對象の物體を手に取りあげて仔細にこれを檢べ、その成りたちを寫生せんとする場合がある。故に一を敎へて、他の一を敎へて置かなければ、寫生は常に一方法しかないと思惟するに到るかも知れない。商業美術の場合では、そのいづれの場合も必要なることが生ずるものである故、第二の寫生方法として、ここに櫻の小枝を折り取つて來て、その小枝の成りたち、花の形狀を仔細に檢べて、これを畫面に記錄せしめんとするのである。故にこの描法は洋風畫と異なり陰影の調子や、遠近法の必要はないが、ここに新しく物を觀る別の方法があることを敎へることになるのである。

故にこの寫生では陰影や遠近法を沒却して親しく手に取らせて、その成りたちを描かせることが大切である。そして如何に精密に見たか否かを驗するのである。

敎本では敎材に櫻の小枝が與へられてゐるが、別に他の草花を以てしても差支はない。

(6) ふりかけ圖法——模樣のいろいろ

これは前の方眼模樣の彩色と違つて、別の彩色方法によつて、圖案の面白味を體得する塗彩法である。方法としては加工的な手段を施すのであるが、その要領によつて、天分の如何に關せず愼重に落ちついて細心の注意を以て試みるものには必ず好結果をもたらす彩色法である。故に前に方眼紙の塗彩で綿密叮嚀な訓練が與へられるものとしたならば、この方法では愼重、細心な性格を養成するに役立つのである。急ぐもの、粗忽なもの、不注意なものは必ず失敗するが、落ちついて細心なものは必ず成功するので、その點で甚だ興味ある學習である。

用意するものは木の葉、厚紙、鋏といつたやうなもので、材料を置き並べ、或は重ねて何回も試みさせて見るのである。また網を置いてその上から別の網でふりかけを行ふとか、下にレース編等を敷く等によつて新しい趣きを得ることがある。

(7) 寫生　その三——圓壔形

圓壔形の寫生は、いづれの圖畫敎科書でも必ず試みられるものである。これは物體の丸味と陰影の調子を知るために行はれるもので、前に函の寫生で基礎が出來てゐたならばこの寫生は比較

的樂である。要するに函の寫生の複雜化であり、その發展及び應用と見ればよいのである。

(8) 文字の適合——圖案文字

圖畫科に於ては文字は比較的閑却されてゐたものである。文字に對する留意は從來に於て餘りなかつた。たま〳〵圖案文字として圖畫の教科書に採用されてゐるのを見れば、文字は餘りに圖案化に過ぎ、實用廣告文字としての文字の根本的な描き方を教へてゐるものは殆ど無いといつてもよい。單に例證としての二三を擧げてゐるに過ぎない。

それでは生徒に眞に文字の描き方の根本的な技術を與へることは出來ないのである。

廣告用の實用文字としての、最もよい文字を得ようとするには、先づ文字が讀みやすく、わかり易く、字並びが美しいものを得るやうな方法を授けなくてはならぬ。それには、文字が一定の劃の中に空間塡充の組織を以て完成してゐるものでなければならぬ。

それを得るには少くとも文字が劃の中で空間塡充するコツを悟らせる必要がある。それには適合法が最良の方法である。よつて圓形若しくは方形を與へてその中に文字が適合することを教へるならば、まづそのコツに早く慣れしめることが出來る。それ故本書ではその範例を擧げた譯である。同時にこの文字の適合を學ぶことによつて、次に來る適合圖案のコツも同時に體得せしめ得るの便宜を生じるので、この文字の適合法は、ある意味に於て、適合圖案の基礎習練ともいへ

る譯である。

(9) 寫生　その四——ほほづきと花(毛筆淡彩畫)

第五の時間に於ける櫻の小枝の寫生は、圖案の場合の材料となる寫生圖である。故にその寫生には用筆に何を用ひようと問題はない。

しかしこの場合に於ける寫生は用筆として毛筆をとりあげてゐる。毛筆をとりあげたのは寫生として別に意味があるためでなく、たゞ用筆の練習として、毛筆を用ひた場合の、毛筆その物の味を味はさうとしたためである。從來日本畫の味の中には用筆の味を尊重するものがある。その意味にて物を描く場合の線の味としての毛筆をとりあげたのである。故にここでは用筆の味をよく玩味せしめることが主眼である。

(10) 影繪——動物の姿態いろいろ

物の表現にはいろ〳〵ある。影繪は圖案的表現に於ては最も緣故の深い表現である。物を單化して見るといふことは圖案に於て一つの方法である。それにこの影繪式の描法は極く初歩の人でも手をつけやすい方法でもある。故に先づ物を影繪式に表現することによつて、圖案的表現の方法を敎へることも一つの方法である。これが完全に出來、それに着彩の方法宜しきを得るならば期せずして相當面白い圖案紋樣を得せしめることにもなるのである。よつてむづかしい事物はこ

の影繪式によつて事物の看取を行はしめるのが得策である。また、この影繪はふりかけ用の切り抜きともなり、その應用は廣い。

(11) 寫生　その五——りんごと紙袋

さきに函を描いて物體の明るい部分と影の部分の區別を知り、次に圓壔形によつて、その明暗の分明ならざる物體の陰影の調子を學び、それにてやゝ物像の寫生は完全かと考へられたが、更に物象の中には球形をなすもの、不整形の立體をなすもの等に及んで、その描法も體得して置く必要がある。この際に於ける影のつけ方は如何にすべきか、用筆の扱ひは如何にすべきかといふことは、これまた重大な關心を要するものである。よつて本圖に於てその要領を理解さすやう試みたものである。物の寫生もたゞ一回一事物のみについては不安心である。あらゆるもの、あらゆる場合について、諸種の方法を知らしめることが必要である。しかし、洋風畫の寫生の初歩としては先づこの部分までは是非心得置かしめてよいものと信ずるのである。

(12) 略畫の描き方——動物のいろいろ

洋風畫に於ても圖案畫に於ても必要な寫生の方法は今迄の處で、大體基礎的な心得を與へ得たものであるが、凡そ突嗟の場合に物に對して、その事物を看取し、これを描きとゞめ、または表現するといふことは、また極めて緊要な事柄である。ここに於て略畫の描法の必要が生じる。即

ち本圖に於てその方法を滿足させようとするのである。

以上によつて、先づ第一の基礎は終る。同時に以上が第一學期中に課せらるべき教材であり順序である。

若し以上に於て時間があまるならば、その不足と思はるゝ部分に於て寫生なり模寫なり、隨時に別の教材を以て課せられてよいのである。就中洋風畫、日本畫の寫生は以上の時間では不足である故、これは二學期となつても時間の餘裕のある時十分その補ひをつけて頂きたい。

第一學期　時間配當

講義	時間	實習	時間
用具の取扱	1	臨模	2
色の名稱と混色	1	彩色	2
寫生の仕方	1	寫生	3
文字の適合	1	文字の適合	1
略畫の描法	1	略畫の描法	1
合計　十四時間			

夏休の宿題

(1) 卓上靜物（夏の果物）＝鉛筆畫淡彩

(2) 夏の草花＝毛筆畫淡彩

(3) 方眼紙の模樣によるテーブルクロス

(4) ふりかけ模樣にて浴衣の模樣＝木の葉の利用

第二學期

目的 第一學期に於て習得した技術を基礎として、その應用の方法を敎へ、數々の應用例によつて、その實力を養成することに努める。

(13) 應用圖案 その一——影繪の應用

一學期第十の時間に於ける影繪の應用圖案である。卽ちその影繪を用ひて如何なるものが出來るかといふことを知らしめるのである。

そして、この方法はカツトなり、看板なり、ポスターなり各種に應用することが出來るといふことを敎へる。

(14) 適合圖案——草花の圖案

草花を題材にとつて、文字の適合圖案の要領を基礎として圖案せしめるのである。その圖案の中には各種の樣式のあることを知らしめる。これは二年になつた場合にも敎へられる。

(15)—(22) 應用圖案と文字の圖案

以上は悉く圖案の應用であるが故に、圖案の應用が如何に實生活上廣汎に亙る分野を持つてゐるかといふことを生徒に知らしめ、且つそれ等のものに親し味を持たせることに努める。故にこの敎材に關する限りでは各時間に從つてそれ等のものを模寫せしめ、一方なほ生徒等の身邊にある實物を蒐集せしめて、他日の參考になるやう備へしめ、それについて敎師は、それ等の分類を示すやうなことをする。さうすれば生徒は日常接する商業美術的製作物に興味を覺えて、それ等をよく觀察し批判するの道を拓くに至る。かくて商業美術修業の第二の階梯を終る。

なほ、應用圖案の作例を模寫せしめることによつて、他日實際に自分が考察する場合の筆慣らしとしてもこの際大いに役にたつといふものである。

初年級に於ては自ら工夫し考察するといふことは無理であるかも知れない。それは圖案の考へ方（二年級）が終つてからの方が自然であり、また、實物の用途・概念等（三年級以後）が理解されてからの方がよい故、この際は模寫にとゞめて、たゞ腕の修業に努めるのがよいのである。

以上を以て二學期とする。二學期は一學期に比し、比較的心得るべきことが少いやうであるが、一學期は基礎中の基礎であり、二學期は商業美術の實質について學ぶものである故に、模寫に多少の時間を要すると見て、時間の伸縮性はこれを以て十分と思はれるのである。

第二學期　時間配當

講義	時間	實習	時間
應用圖案について	1	實習臨模	13
合計　十四時間 右適宜に課せられたし			

冬休の宿題

(1) 歳暮賣出しの廣告物の蒐集
(2) 年賀繪ハガキの作製と蒐集
(3) マツチレツテルの蒐集

第三學期

目的　一學期に於て表現描畫の基礎技術、二學期に於てその技術の應用としての圖案に對する實用方法を敎へ得たとしたならば、三學期は更に一歩を進めて、頭の働らきを養成することに貴す。故に組合せ組立の方法に入る。

そして一方物を工夫する頭を養成すると共に、他方に物を觀る眼を養ひ、繪畫の觀賞について若干の知識を與へる。

(23)　ペン畫――靴の寫眞とペン畫

ペン畫の描法は從來の圖畫科では比較的等閑に附されてゐたものである。しかし、商業繪畫の實際としては、製版の關係上凸版下繪として最も需要の廣いものであつて、これに慣れると慣れないのとでは、一つの挿畫を作るにしても實生活の便利不便利を生ずる故、少くとも物を見て、これを畫くにペンを以てする方法も敎へて置く必要があるのである。今日の新聞雜誌の畫版の性質は、大抵凸版であることに思ひ到るならば、その原稿としてペン畫の價値を認識しなくてはならない。

よつて先づ寫眞をペン畫に直す方法を以て、凸版下圖的ペン畫を課することを必要とするのである。これは、この敎本のみによらず、別の實物を敎材として與へてもよい。

(24)　ペン畫と應用圖案――汽船と汽船のポスター

これはペン畫の教材ではない。寫生が如何やうに變化されて用ひられるかといふ一つの實例を示したものであつて、寫生から單化圖案に、單化圖案から更に目的々々に應用化されてポスターに利用されたことを示したものである。故に一つの寫生もこのやうにして利用し得ることを教へるのが主眼である。同時にこの圖に於てペン畫の教材ともなり、圖案の教材ともなり、ポスターの教材ともなつてゐる。

されば教師の方はこの場面をその任意によつて生徒に課しても、又利用の範圍を廣め得るのである。

(25) 組合せ組立——貼り紙と積木

組合せ組立は、要するに貼り合せと積木によつて習練せしめることが出來る。子供の時分の積木の遊戯は一つの組合せの習練である。これを今ここに再認識せしめて、陳列窓背景のために或は建築の形態のために、諸種の材料を貼り合せ組立てるといふことは、彼等の構成能力を試すに一つの方法である。

これによつて、彼等の二次元三次元更に四次元の世界の創造迄にも發展せしめる道を得る。

(26) 構圖の採り方——構圖の採り方說明圖

組合せ組立によつて、自由に構成する面白味を知つても、如何なる構成が美的であり、如何なる風にすることが最も釣合があり權衡がとれてゐるものであるかといふことを知るには、少くともそれ等の正しい認識を與へる必要がある。よつてこの構圖の採り方はその良不良とを見分けさせる材料であつて、これによつて鑑識眼を養ふ。されば教師はこの材料を以て靜物の構成に、陳列窓の配置に、或は新聞廣告面のスペースの分割等を指導することが出來る。ここには二三の實例しかないが、これを基として更に材料を各方面から漁れば、これに準ずるものは無數である故生徒の蒐めて來たものの中から摘出して實例を示してもよし、また教師自らの蒐集を材料にしてもよいのである。

(27)—(29) 繪の見方

現代の人々の最大の缺陷は繪の見方を知らないことである。今日まで圖畫教育は屢〻行はれて來たが、凡そ繪を見る力を持つてゐるものは甚だ少い。繪を見る力が無い以上如何に情操教育を論じても繪に對する興味も起らねば、繪に近づくことも少いのである。

これは要するに鑑賞教育が施されてゐないからである。商業美術には鑑賞教育は必要でないかの如く考へられてゐるが、却つて美に對する觀念は一層明確に把持する必要があるのである。故に今初學年の間に於て繪の見方を教へて置くことは必要である。

それ故最初に繪は如何なる所を見るべきかといふことを教へ、次に各時代各國の美術について

その特性、主張、變遷等を知悉せしめるならば生徒も自ら興味を起すのである。

そして、その美の所在が確知されたならば、商業美術の創作も又容易なのである。

(28)(29)は共に鑑賞のために備へられたもので、これは、普通の教育の間に閑を見て隨時教へられることを希望するものである。

一學年の課程は以上によつて終る。

第三學期　時間配當

講義	時間	實習	時間
構圖の採り方	1	ペン畫	2
繪の見方	7	組合せ組立	2
合計　十二時間			

この配當が餘り偏るやうなれば、繪の見方の講義を適宜二學期の方に廻し、第三學期に應用圖案の一部を廻してもよい。

用具の解說（一、用具の知識）

教本の方では、普通生徒が備へて置かねばならぬ程度の用具を示して置いたが、完全な用具としては左の如きものを用意する必要がある。

製圖版　これは畫用紙を貼りつけ、又製圖する時に必要なもので、朴或はベニア板等で作られたものが普通で、十分に乾燥して反りや隙目のないもので、且つ角が常に直角で狂はぬ樣に作られてゐることが必要である。値段はその大きさによつて區々であるが相當に高い。大判畫用紙位のもので十圓位を拂はなければならぬ故、生徒には不向きである。それ故生徒に買はせるものとしてならば特別に作らせなくてはならぬ。それにはラワン材等を用ひるがよく、狂ひが來たり反つたりして不完全たることは免れぬが、ラワン材のものならば、二尺五寸に二尺位のものならば二圓五十錢位で作ることが出來る。

この圖板の大きさは、標準として左記の大きさが定められてある。

小形＝長さ二尺、幅一尺五寸。畫用紙半截中判、ケント紙半截の大きさに適する。

中形＝長さ二尺五寸、幅二尺。畫用紙、中判ケント紙、中判ワットマン紙用に適する。
大形＝長さ三尺五寸、幅二尺五寸。大判畫用紙、大判ケント紙、大判ワットマン紙等に適する
極大形＝長さ三尺七寸、幅二尺七寸。これは四六全判の紙を用ひるに適する。これが一番大きい。ポスターの四六全判といふものを描くのにはこれを選ぶより仕方がない。

右の圖板の代りに用ひるものとしては假張といふものを用ひるが、これは厚い濾紙を貼つて作るもので、日本畫家や染織圖案家が用ひるものである。しかしこの假張では硬い鉛筆や製圖用具は使へない故、先づ圖板の方が便利である。しかし學校の實際としては値段も張るし、持扱ひにも厄介であり、初學年では左程必要はない故、圖板は省略してもよいのである。二、三見本乃至參考として學校に備へつけて置く位でよい。

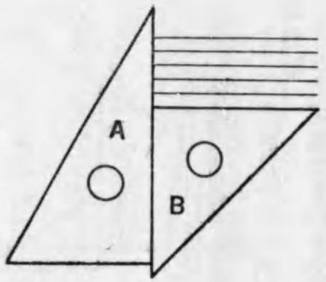
定規　直線を正確に引くに用ひる道具である。教本の第一圖上方の三角形をしてゐるのは三角定規と稱するものである。定規はこの三角定規の他に丁形定規といふものがあり、曲線用のために雲形定規といふものがあるが、生徒にはこの三角定規の二種位備へさせればよい。材料は櫻を普通とし、椽に竹又は黑柿等を用ひてすべりがよいやうにしてある。木製の外にセルロイドやエボナイトで出來たものもあるが、反り返つたりして面白くないから、矢張りこの木製を選ぶのがよい。大きさはいろ〳〵あるが、八寸位のものが丁度大きくもなく小さくもなく應用が廣い。

三角定規には二種あつて、三十度・六十度・九十度の各角を有するものと、一角を九十度とし、他の二角を四十五度角を有するものとの二種を持つてゐることが便利である。そしてこれは大抵一組になつてゐる。

この三角定規を扱ふのには二枚あれば左のやうな場合に便利である。

(1) 平行線を引く場合
一つの定規の上に他の定規を合せて線を引き、一方を辷らせて行くことで平行線を簡單に引いてゆくことが出來る。(上圖參照)

(2) 正六角形及び正八角形を描く場合
正六角形を描くには製圖用具を用ひて圓を描いてから分割的に行ふ方法もあるが、定規の角度を用ひて描く方法もある。即ち次頁の圖に示すやうに、六十度の角を利用すれば簡單に正六角形が出來る。



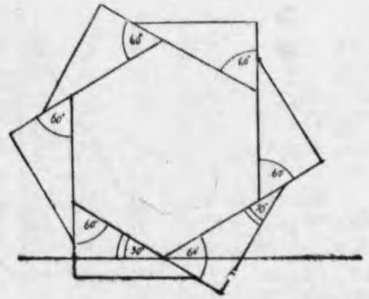
それと同じやうに四十五度角を用ひれば正八角形を作ることが出來る。

物差　これには背溝が作られてゐるものを用ひる。それは和筆を用ひて線を引くに用ひるからである。圖案では繪具を盛つた上に線を引くときは烏口では繪具が切りさかれて色がにじむ俱があるので、專ら和筆の柔いものを用ひて線を引くから、なるべく背溝のついた物差を買は

せるのが便利である。これには尺寸のものとメートル法によるものと兩者あるが、それは教授者の便宜の方を用ひてよい。

製圖用具　普通中等學校程度で用ひるものならば、分割器・穗替兩脚器・烏口の三通り位の程度でよい。やゝ專門的ならば教本圖に示された位のものを用意しなくてはならぬ。

この製圖用具は建築製圖・木工圖案・幾何學模樣、その他正確な線や形を表現するに用ひるので、商業美術では極めて應用が廣い。卽ちマークの圖案、陳列窓や店舗の設計、函の圖案等に用ひ、時によれば文字の圖案にも必要とせられる。

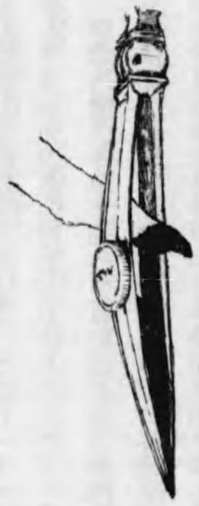


分割器　これは一定の間隔を計るに用ひるもので、卽ち兩脚を開いて物の幅を計り、これを以つて他のものを分割して見るのである。別に描く方には使はれてゐない。描く方に用ひるのは穗替の兩脚器である。

穗替の兩脚器　これは分割器の役目もするが、主として圓を描くのに用ひられる。卽ち一方の足を中心にして、一方の足を廻して圓を作るのである。故に一方の足には鉛筆をさし込み、或は墨汁をたゝへる烏口をさし込むやう穗替になつてゐる。このつぎかへの兩脚器を用ひる場合には中心となる方をしつかり抑へて置いて、廻す方の足を輕く扱へるやうに加減しないと、圓をなめらかに描くことは出來ない。

尙この穗替の兩脚器を用ひる時に大きな圓を畫く時には更に繼脚が用意されてゐる。

烏口　これは一見烏の口のやうに見えるからかく呼ばれる。主としてこの烏の口のところに墨汁をたゝへて線を引くのに用ひる。穗替のも同樣である。墨をたゝへると時には、圖に示すやうに、筆の先もしくは紙片の端で一寸烏の口の所をしごくやうにすればよい。



尙製圖用具には小形のものや豫備のもの等いろいろ用意されてあるが、主とされるものは以上の三つである。

鉛筆　鉛筆は硬いものと軟いものと少くとも二種を用意する必要がある。硬い方は2H、軟い方は5B位が適當である。これは軟い方で大體の輪廓をとり、硬い方でしつかり圖を定めるためである。

この他に消ゴム、羽箒、留鋲等いろ〳〵あるが、ゴムは是非入用として、羽箒は他の物を何か代用してもよい。留鋲は若干備へつけて置けば畫用紙が動かなくてよい。

彩色用具　さて愈、繪具を塗るには彩色筆・筆洗・繪具皿等が必要である。教本に示してあるものでは中等學校に大體間に合ふ程度のもので、筆洗も手輕なブリキ製の小型なものである。

筆洗に二つの區劃がしてあるのは一方の大きい方は汚れた筆を洗ふところで、一方の小さいところはその筆を更に清めるために洗ふところである。

繪具皿は、白い皿ならば何でもよいが、直徑二寸か二寸五分位の平皿が適當である。これを四五枚用意して置く必要がある。それは、ポスターカラーを扱ふ場合等では一色一色に別の皿を必要とするからである。

筆は大體三本位を備へて置けばよい。專門家になれば大小種々必要であり、大きいところを塗るには刷毛を用ひ、細かいところでは蒔繪筆或は面相筆といふやうなものが必要であるが、中等學校では大中小三本位の日本畫用の彩色筆があればよい。水彩畫用の筆は線を描くには適せぬからこれは不向きである。それでこれを區別して必要とされるのは骨相筆・隈筆・平筆といふことになるのであるが、先づ普通の彩色筆でよい。

骨相筆といふのは、普通の水筆より稍穂長であつて、毛の硬い筆である。主として線かきに用ひられる。

隈筆といふのは太く短い筆であつて、繪具をぼかす時に用ひられる。

平筆といふのは文字の太さを一定に保たせるによいもので、横に用ひればその筆の幅が太く、縱に用ひれば比較的細く、つまり太さの幅を一定にするに都合のよい筆である。故に圖案家仲間では大抵この筆を用ひて文字を描くことにしてゐる。又繪具を平らに廣く塗る場合にも大分役立てられる。

面相筆は穂が長くて、細く長い線を引くに用ひるので、これは一寸初めての人には扱ひにくい。

蒔繪筆は所謂蒔繪具に使はれたもので、極く密なところを塗るのに用ひられる。極細字や、非常に狹いところを塗るによい。

刷毛は大きな場面を塗る時、又は紙を水貼する場合等に便利なものであるが、幅は二寸、二寸五分、三寸、五寸といろ〳〵ある。これは無暗に毛の拔けないものを選ばなくてはならぬ。安物の糊刷毛などは絶對に禁物である。

繪具　繪具は主としてポスターカラーを用ひるのが便利である。勿論初歩の間は寫生が多いからの繪具ばかりに賴ることは出來ない。ポスターカラーも水を多くして用ひれば大體は水彩畫のやうにも使へる故、先づポスターカラーを備へて置けば便利である。

繪具については後章で述べることとする。

フリカケ用具　それから近頃流行しだした彩色法の一種にフリカケといふものがある。これは網の目を越して刷毛を擦つて、色をふりかけて彩色するのであるが、先づ繪具の色を施さうとするところに必要な輪廓を紙を切りぬいて置き、これを定着せしめてから、フリカケ網を片手に、片手の刷毛を以つて繪具を擦るのである。すると繪具は霧のやうにその上にふりかゝつて恰もぼかされたやうに着色される。

それには繪具を用ひるのに餘り水分が多くてもいけず、又水分が少くてもよくないが、二三度試みれば直ぐに手加減が出來るからやさしいものである。從つてはじめて繪をかくものなどは知らず〳〵に興味を覺えて、この方法を敎へることから自然に商業美術が好きになる傾向がある。

色の知識（二、色の名稱と混色）

初學年にあつては色彩學上のいろ〳〵の知識を敎へることはむづかしい。たゞ簡單な色の名稱とか、繪具が混色した場合の現象等を敎へて置くことが必要である。それは繪具を扱ふ上に於て先づ色の名稱は必要であるし、何の色と何の色を混ぜれば何の色が出るかといふことは、初學年としても覺えたい事柄であるからである。特に將來いろ〳〵の圖案を行ふについてはその修練をして置く必要がある。

三原色　先づ黃、赤、青を色科の三原色といふ。原色といふのは、一つの色から更に別の色に分解することも出來ず、又、他の色を混合してもその色を出し得ぬ色をいふので、即ち赤は黃と青との混合でもなければ、赤から黃と青とをとり出すことも出來ないのである。

黃も青も又同樣で、青は黃と赤との混合でもなく、青から黃と赤とをとり出すことも出來ない。黃も青と赤との混合でもなく、黃から赤も青も取り出すことは出來ないのである。

故に生徒にはまづこの原色の意味をよく呑み込ませる必要がある。

混色　次に原色の色を混じ合ふと別の違つた色相のものが出來る。即ち黃と赤とを混合すれば橙色を、赤と青とを混合すれば紫を、黃と青とを混合すれば綠といふ風に出來る。

かくして出來た色を混色といふ。しかしこの色料による混合では綠に於けるグリーンは出來てもエメラルド色は出來ない。たゞ大體に概念的な綠が得られるものとしなければならないのである。故に色も嚴密に必要とすれば特別に各〻の色を作らなければ複雜な繪具の色は得られぬ。

これは繪具といふものが化學的製品である故に、必ずしも色が光の如く物理的な作用を示すものでないことを明らかにするもので、この點について、この場合では色の三原色について光や光の性質並びに光から見た原色のこと等も生徒に話す必要が起るのであるが、初學年の間では却つ

て難解となり易いので、ここでは色は混ぜ合せていろ〳〵に用ひられるといふにとゞめて、色の原理については上級の場合にゆづる方が適當と考へられる。

間色と再間色　卽ちここでは原色、混色といふことを會得せしめ、その混色の中で、原色と原色との組合せを間色といひ、間色と原色、或は間色と間色との組合せを再間色ともいふとのことを敎へて置くにとゞめる。

白と黑とは光の場合では一方は光であり一方は光の無いことを意味するが、繪具では白・黑とも存在するものであつて、白と黑との混色では鼠色であり、この鼠色は白と黑との間色といふことが出來る。

要するにこの時間では色の原色、混色、間色といふこと及び色の名稱を覺えしめるといふことが主眼である。

彩　色　法（三、彩色の練習）

色の名稱や三原色の扱ひ方等を習得したならば色の塗りかたを練習するのが順序である。

彩色の仕方については水彩畫やクレイヨンや、油繪具といふ風にその材料によつてその方法はいろ〳〵に分れるが、ここではポスターカラーの塗り方を敎へることにする。

ポスターカラーの塗り方

ポスターカラーを用ひるには先づ左記の用具を必要とする。

用具　筆洗　かなり深く大きい二個の區分あるもの。

皿若しくはパレット　これは敎本の第一圖に示されてゐたやうな學生向きの筆洗と皿を用ひることが便利である。皿を數多必要とするのはなるべく一色を一皿として、餘り他の色と混合せぬ方が效果がよいからである。

彩色筆　これも第一圖に示されたものを用ひる。なるべくは日本畫用又は圖案用の筆を用ひて、水彩畫用の筆は扱ひにくいから避ける方がよい。卽ち平刷毛、隈筆、彩色筆、どれでもよいが、先づ最初の練習としては中位の彩色筆を用ひて練習することにする。

繪具　繪具は第二で示したやうな色は大抵あるが皆瓶入である故、これを先づ竹ベラ若しくはパレットナイフ（鋼製の彈力あるナイフ樣の篦）又は筆の先きで必要なだけ皿の上に取り出して、水を少しづゝ加へてよくこれを煉つて用ひるのである。

皿の上に取り出す色の分量は、大體自分が塗らうとする場面より少し多い位でなければ中途で繪具が無くなつて、更に煉らなければならぬ不便があり、繪具が中途で切れると、畫面は色の調

子が變つて所謂ムラが出來、美しくならぬので、繪具の分量を見るといふことは大切である。これははじめの間はすこし困難であるが、二三回繰り返す間に大體の見當を知るやうになる。

色の濃淡　色の濃淡を出すのは水彩畫の繪具のやうに水で加減するのでなく、油繪具と同じやうに色でその調子をとゝのへるので、すべて色の分量の加へ方によつてその濃淡が定まる。それ故水はたゞ繪具が粘らぬやう、筆が澁滯せぬやうに用ひるので、決して水を多く加へぬことを注意しなくてはならぬ。水が多いと、繪具と水とがはなれて塗つた結果はムラが出來て面白くない。故に繪具が粘り、筆が澁滯するやうであつたならば、ホンの一滴か二滴たらして繪具を溶くやうにすればよいのである。

塗り方　塗り方には三つの場合があつて、地色塗、模樣描き、線描きとによつて、それ〴〵筆も違へば、塗り方も違ふことを心得てゐなければならぬ。

(1)地色塗　廣い部分を平に塗るのであるから、これには餘程大きければ平刷毛を用ひ、畫用紙八ツ切位なれば、普通の大彩色筆でも事が足りる。この塗り方は彩色筆にたつぷり繪具をふくませて、隅或は周圍の方から徐々に縱横に手際よく平均に乾くやうに塗るのである。そして若し途中で早く乾くところと、濕りの多いところがあつたならばムラになる惧がある故、これを平均にならすやうに二度も三度も筆を施す必要がある。そしてなるべく平均に霑ひ平均に乾くやうに工夫しなければならぬ。

(2)模樣描き　小部分宛小區劃的に塗るのである故、これには平刷毛や大きい筆を用ひることは少い。先づ中位の彩色筆で、その區劃宛を細心な注意で塗ればよいので、比較的容易である。

(3)線描き　面相筆か或は蒔繪筆のやうな細い筆を用ひる。これには餘り多く繪具を筆に含ませぬ方がよい。曲線の場合は自由に輪廓に添つて描くだけであるが、直線の場合は、なるべく烏口を用ひずに物差についてゐる溝を利用して、圖のやうに一本の筆を杖に辷らせて行けば烏口を用ひたと同じやうな線を引くことが出來る。しかしこれは仲々な練習を要することを覺悟しなければならぬ。

しかしポスターカラーや胡粉性の繪具で地色が塗られてゐるものに線を引くのにはなるべくこの物差の溝を利用したものの方が效果がよい。線を引くのには製圖用の烏口で引くと綺麗な線になるが、このポスターカラーや胡粉の場合では却つて筆を用ひて物差の溝をたよりにした直線の方がよいのである。それは烏口では金屬性である故、地色が胡粉性のものでは線を引いた際に繪具の層を切りさいて、そこから色がにじんで線が太くなる惧がある故に、輕く上を辷らせた筆の

線の方が歡迎されるのである。

入組の多い圖案の地色　これで大體彩色の要領は十分であるが、尙補足して置くと、入組の多い圖案の地色を塗る際にはどんなに注意をしても、入組の方に氣をとられて繪具が平均に乾くやうに塗ることはむづかしいものである。かやうな際にはその入組をぬきがきするのをなるべく避けるやう工夫するのである。それには二つの工夫がある。

一つは下圖の時に硬鉛筆で深く溝が出來る位に輪廓を描いて置き、入組に頓着なく地色を塗つてから、ぬきがきすべきところを別に他の色を濃くして溝を辿つて描けばよいのである。しかしこの方法は最初の地色を塗る時に繪具が厚過ぎると折角の色が埋まつて不明になる惧がないとも限らぬ。故にこれは地色が薄く塗られる場合に限る。

今一つの方法は、下圖をとつたならば、その上に薄葉の紙を一枚麩のりを薄めたもので伏せ貼りにし、色を塗らうとするところだけを薄葉の紙を透して見える輪廓を薄刄のかみそりか何かで切りとつて他に拘泥することなく自由に塗るのである。そして次第に必要に應じて切りぬきつゝ塗れば、適當に塗ることが出來るのである。しかしこれ等は仲々手間が要するので一時間や二時間の仕事には向かぬ。

それで、この彩色の時には、先づ繪具の煉り方と、簡單な輪廓を描かせて、先づポスターカラーの地色塗の稽古をさせて見るのである。そして宿題として教本にあるやうな方眼紙の模樣を描かせて見るのである。

この練習は非常に叮嚀で綿密でなければ仕事が美しくゆかぬので、自然と生徒に細心な習慣が養はれる。

そしてこの練習の際に圖案や模樣の面白味を悟らせるとよい。先づ圖案は繪具を一區劃宛埋めることから進ませるのである。

色の類似と對比　尙この際に色の類似とか色の對比といふことを教へて置くとよい。

即ち同一系統の色は類似色であり、反對の色同志では對比であることを教へ、同じ系統の色には白の分量を手加減することによつて色の濃いものから淡いものが出來ることを知らせるのもよい。

尙この圖ではいろ〳〵なことを學ばせることが出來る。即ち形の連續、散點模樣、繻繝式の模樣等、いろ〳〵な場合を示すことが出來るのである。

見取寫生（四、寫生　その一）

見取寫生

寫生の必要　物の形を正確に描くには少くとも物の形を見ることが大切である。洋畫寫生の根本は觀察の習練といつてもよい。將來商業美術のポスターやその他新開廣告等を作る場合にも物を正確に描き表はさねばならぬことが多い。

それには第一に畫を描くことにすぐれてゐることが必要である。畫を描くことにすぐれてゐるといふのは、要するに、物の形を正しく如實に描き表はせることであつて、それは先づ寫生の熟達からはじまる。

寫生の心得　寫生で心得なければならぬことはいろ〳〵あるが、先づ第一には寫さうとするもののそつて見える。即ち、上から見えるか下から見えるか、眞正面に見えるか、遠く見えるか近く見えるか、それによつて先づ物の關係が一切知れるのである。これは遠近法とか透視圖法といふことで正確に書き現はすことが出來る。しかし今初學年の人に透視圖法のことなどを說明して寫生にとりかゝらせるのはむづかしい故、見取圖として物を見ることに慣れしめることが必要である。

そして、この際には近くのものは大きく、遠くのものは小さく見えるといふことを教へ、自分の目が寫さうとする物よりも上の方にある時は物の上面がよく見え、下になるときは下の方が覗かれるといふことを教へて置く必要がある。寫生には心の中で勝手に定めた恰好や考へだけで物を描くといふことは禁物で、すべて見た通りに正直に描くことが大切である。

寫生の方法はその寫すものと自分の目との關係がわかつたら、第二にはその物の大體の分量を手早く看取することが必要である。即ち函ならば、函の大體の大きさを描き取るのである。その次は、その物の構造である。

構造の次は光つてゐる部分と影の部分との調子の關係である。故にこの寫生では次の事を生徒に注意する必要がある。

(1) 物の位置と方向＝自分とその物との見た恰好
(2) 物の分量＝物の大きさ
(3) 物の構造＝物の組みたてのありさま
(4) 物の陰影の調子

およそこの四つの注意で物を寫すことに慣れることが出來る。それで最初はその寫生に簡便な函形の立體形を選ぶことが有效である。教室などでは筆函等が題材として適當であらう。

線畫の寫生（五、寫生　その二）

寫生に於ける二つの態度　物の寫生にも二樣の態度がある。第四圖の寫生では寫眞のレンズが物を寫したやうにその儘の姿を如實に傳へるのであるが、第五圖に行はれる寫生は、一つのものを採りあげて、仔細に各部を調べて觀念を得ようとする寫生である。故にここでは描くものの眼の位置とか、描かれる物の位置とかは問題でなくて、その物を手にとりあげてさへも描き現はす場合があるのである。この方法は圖案を行ふものにとつては重要な仕事である。卽ち時に想像で物を描かねばならぬ必要が往々にしてある故、平素から物の成りたちをよく調べて物と物との概念を常から念頭に入れて置く必要がある。

故にこれでは寫生といふよりは一つの記錄と考へてもよいので、物の成りたちや形の正確さが問題となるのである。

これも物を觀ることを教へる。この物を見ることそのことが何かについて重要な役割をすることを知らせるのである。

題材は教本では櫻の小枝になつてゐるが、何でも手に入り易い植物でも器物でもを與へてこの練習を行はしめればよいのである。

ふりかけ圖法（六、ふりかけ圖法）

ふりかけの方法　ふりかけの方法は簡單に型ぬきをしたり、或は物を際立てるに際して用ひられるのである。一種の霧吹きの方法に屬するのである。霧吹きやエイアブラシの方法では繪具を吹き飛ばして、繪具を畫面に吹きつけるのであるが、普通の霧吹きでは粒が荒くて面白くゆかぬし、エイアブラシでは特種の用具が要るので、これも學生の修學用には適さない。そこで簡單な用具として、このふりかけの方法を課するのであるが、これならば、簡單に生徒が自分の手で行ふことが出來、これをする際には實物の木の葉等を持ち來つて、ピンで紙の上に留めて置き、網の目の上を筆で擦れば繪具が粉末として飛び散り、面白い形がそこに殘るのである。故に木の葉の配列の如何によつて幾樣にも圖案模樣が得られ、繪に興味を持たぬものも、割合に巧みに效果が現はれる故、自然面白味を感ずるやうになるのである。これのむづかしいところは繪具の溶き方にあるので、繪具を固くせず、さりとて餘り水分を多くすることも不可にて、程よきねばりにして、ふりかけ筆の先端にこれをつけ、靜かに網の上を擦るのである。擦る際はなるべく筆を垂直にたて、はじめは靜かにゆつくり二三度やつて、大體思ふやうな風にふりかけが出來れば手早くサツ

サと擦るのである。そしてこのふりかけを試みる際は、繪具のふりかゝつて悪いところはなるべく他の紙か何かで蔽ひをして置くことを忘れてはならない。しかし、その蔽ひのために型が殘るやうでは折角やつたふりかけの方法が他の部分にも洩れて、畫面が汚くなる憂があるので、そのやうなことがないやうに不要の部分は、ふりかけがかゝつても差支のないやうに紙なり或は他の物で全部蔽ふて置くことが大切である。

そしてこの練習をするのには、とりあへず初めはあり合せの平なもの、或は木の葉等を持參せしめて、その面白味を體得させることが上策である。次に慣れるに從つて、自ら型を切りぬかせて試みさせるのがよい。

上達すれば文字を切りぬいたり繪型等を用ひれば、ポスター等に應用は廣いものである。

圓壔形の寫生（七、寫生　その三）

寫生にも二樣の立場があるといふことは前に述べたが、今ここで行ふ寫生は洋畫の立場で行ふ圓壔形の寫生である。圓壔形の寫生は前の函等の寫生と違つて、各面が切立てでない故、各〻の面の陰影はその境界がハツキリして居ず、頗る困難を感ずるものである。

圓形物の寫生　そこでこの寫生では前の寫生に比べて今一層の注意を要する點は圓形になつてゐるものには、周りがあるにつれて、その面に反射があるといふことを注意すべきである。即ち全部が影であると思つても、若干の反射がなければ、その面は一面に平らに見え易いのでそこに反射の必要があるのである。又事實に於て、全部が影といふものは殆どなく、若干の反射は必ずあるし、圓形なればそれが自然の順序によつて及ぼしてゐるので、その點を注意して見させることが必要である。それとともにこの場面では物質の性質や色によつて、線畫の方の描き方を注意すべきで、そのことをここに解いたものである。即ち鉛筆一色で物を寫生した時には、寫されるものが如何なるものであつても、皆一樣に同じ色に仕上るのであるが、たとへ鉛筆の一色にしても寫されるものが同じ色に見えるやうでは面白くない。少くともその色は鉛筆の扱ひ方や描線の關係によつて、大體その色の心持がうかがはれるやうに物が寫生されてゐなければならないので、それも注意すべきことである。そのためにここには色の黑い漆ぬりの罐とブリキその儘の物とを教材として示してその描法を示したのである。

適　合（八、文字の適合）

適合の意義　適合といふことは「あてはめる」といふことであつて、先づ圖案の初步訓練ともいふことが出來る。卽ち或物の形の中へ或物をあてはめるのであつて、物と物とが旨くなじむやうに物を仕上げるのである。商業美術の場合ではこれは目的を持つた美術である故、物にあてはめるといふことは大切である。卽ちこの習練を度重ねてゆくことが、物にあてはめるといふ適合の精神を養ふので、畫も氣まゝに描いてもそれが目的にしつくり合つてゐるといふことが必要なのである。それ故この意味で最初から適合の圖案を基礎として習練をするので、これを行ふのには先づ文字の適合といふことからはじめるのが便利である。といふのは文字を或目的に合せて讀みやすく見やすいやうにするためには一定の劃の中に治める、卽ち適合といふことが大切だからである。卽ちこの適合のことを文字を基礎として學んでゐるうちに、いろ〳〵な物を適合することに慣れて來る故、この場合では文字を圓形・方形・三角形・多角形といふやうないろ〳〵な形の劃の中に入れて練習するのである。そしてこの適合については豫じめ左のことも心に入れて置くことが便利である。

あてはめ模樣　今圖案の立場から、この適合、卽ちあてはめの模樣を見ると左の關係になつてゐることを知る。

卽ちこのあてはめの模樣は、圖案の中でも初步であつて、模樣圖案をするにも單獨模樣のことがよく熟練されてから連續模樣に及ぶのが便利で、いはゞ基礎と考へてよいのである。

- 模樣
  - 單獨模樣
    - あてはめ模樣
      - 塡充模樣
      - 點裝模樣
    - 氣好模樣
  - 連續模樣

このあてはめ模樣には二つの場合がある。卽ち一つは塡充をなすもので劃の面の部分よりも、模樣の面の方が多いものをいひ、一つは點裝と稱するもので、劃の面の部分が模樣の部分よりも多い分量をとるものである。これによつて、塡充の方はドツシリとした適合となり、豪華な模樣となるものである。それに反して點裝の場合では線が主である故、見たところでは空間が廣くてあつさりとした圖案となるものである。これによつて二種の表現を得ることが出來る。教本の場合では平假名の分は點裝であり、漢字の方は塡充の趣を呈してゐるものである。

圖案文字の重要性　廣告では文字を用ひることは屢〻ある。故に文字であつても廣告の目的から考へる時は美術的でなければならぬ場合がある。それといふのは、文字にも人を惹きつけるやうな力を持たせるために種々な工夫をすることが大切だからで、この意味で圖案文字といふもの

が重要視される譯である。ところが圖案文字が重要視されてゐるといふことだけがわかつてゐても、圖案文字その物の力や取扱を知らなくては、折角の文字を殺すことが多い。文字を生かして使ふためには先づ廣告の場合には文字は如何に書くべきかといふことを知つてゐなければならないのである。

文字の圖案化　文字を圖案化するといふのは勿論人に見て貰つて氣持のよいものにするといふことであるが、廣告文字の場合では、(一)早く人目につき、(二)讀みやすいといふことを主眼とせねばならぬ。この意味で文字を一定の劃の中に統制したり、廣告文字が餘り圖案に凝り過ぎて一寸見たのでは文字の意味がわからぬやうなものであつては、何の甲斐もないものである。その意味をよく呑み込んで圖案文字の正しい使ひ方を心がくべきである。

日本畫の習作寫生　(九、寫生　その四)

精神的寫生法　寫生の四として擧げるのは日本畫の習作寫生の要領である。これは洋畫寫生のやうに、物を一定の場所に置いて一定の距離から眺めて物を寫すのでなく、又圖案の資料の寫生のやうに一々仔細に點檢してその成りたちや姿を解剖的に見るのでもなく、これは寫生に當つて寫されるものの本體、即ち精神をよく學ぶといふ寫生である。故に物を寫してもたゞ形だけが似てゐるといふのでは、まだ寫生でなく、その物の性質が一線一劃の間によく描き出されるといふことが重視されなければならぬものである。即ち花ならばその花のやさしい氣持が線の中に示されてゐることが大切なのである。されば、この寫生では物の内部に迄深入りして、物をよく見るといふことが大切となるのである。洋畫の寫生が物の外面から物の姿や形の成りたちをどこ迄もつき込んで寫生するのに對して、これは物の内部の精神に迄つき進む寫生の方法である。故にこれは專ら日本畫の精神的寫生法ともいへる。物の硬さ軟かさ、物の若さや古さ、物の强さ弱さといふやうなものは、見ただけでわからないが、よく考へをこらすと、その内にその物の性質をつかまへることが出來るので、その要領を考へるのである。

シルヱット　(一〇、影繪)

この影畫の方法は一つの畫法であるが同時に圖案法としては又一つの初歩の領域にも入るものでもある。即ち物の形の一面を一樣に影のやうに黑くして示すもので、いはゞ物の外の輪廓だけで物の形を示すものである。故に物を示すものとしては最も簡單な描法といふことが出來る。こ

れのことをシルエツトといふ。

シルエツトの意義　シルエツトといふのは、フランスのルイ十四世の臣にシルエツトといふ人があつてこの人の名より出たものであるといはれてゐる。シルエツトといふ意義は、前記のシルエツトといふ人が要職に就いた時に大規模の經費節減を行ひ、繪畫に迄その趣旨を徹底させようとして、肖像畫も白と黑とで示すやうなものにした結果、ランプ或は蠟燭で白紙の上に投じられた人の顏卽ち影畫といふものが、當時のパリに流行して、それから影繪のことをシルエツトといふやうになつたのである。この意味で物の形を輪廓だけで示すものをシルエツトとし、圖案便化の方法の中では最も簡便なので圖案技法としては最初にとりあげて、先づ物の描寫に用ひようとするのである。教本の圖中では物の形をシルエツト風に出して、簡單な眼をつけた位のもので、更に進むと挿畫のやうな要領で、よくポスター等にも用ひられるものである。

丸い物の寫生（一一、寫生　その五）

丸いものの寫生と量の關係　前に洋畫の寫生を述べたが洋畫の寫生でも愈〻むづかしくなるのは丸い物の寫生である。物體は大抵一定の分量といふものを持つてゐる。その分量を早く看取してその分量の心持を畫面に表現しようとするのが卽ち洋畫の寫生では物の寫生となるのである。故に物には分量があるといふことを考へなくてはならね。この分量といふものがあるといふことをよく表現し得た時に、物には厚みがあり重味があり、物にはそれ〴〵の性質があるといふことが示されるのである。今教材に林檎と紙袋とがとりあげられたが、林檎では丸くてすべ〳〵してゐて、肉に厚味があることが察せられ、紙袋では一見分量があるやうに見えるが、それは中が空虛であるといふことが表現されてゐるのである。よつて、洋畫による物の寫生の時に第一に注意すべきことは物の分量であつて、その分量といふことが看取出來る時、物の影は大體の精神を示すことが出來るのである。故にこの心して物の寫生をすべきで、この立場から丸い物を描くときはその分量を表現するために表面に見えてゐる影や光の關係を忠實に見て、分量の有樣を示すのである。光や影については前に圓壔形のところで示したやうに反射といふこともあるので、この表現はよく注意しなければならない。そしてこの物の表現には物質によつて陰影のつけ方を描線によつて區別すべきで、物が硬いか軟いかの區別はすべて描線の扱ひ方にある。卽ち線を揃へて正確に引く時は物が硬く見え、線をやゝ樂に自由にするときは物が軟かく見える故、その心して物の性質を描きとるべきである。

略　畫（一二、略畫の描き方）

略畫は簡單にして要を得、一種の趣きを見せる畫樣の一つで、筆數を少くして物の形を示すところに特徴がある。故に水墨畫の類では畫法練習の一つとしてこの略畫の方法を用ひたものである。略畫の根本を述べると、要するに、物のほんの骨組だけを示し、その形のあらましを表現するものである。この意味からいふと、物の寫生には洋畫の場合で分量の看取といふことと同じことなるものである。即ち物を寫生する場合では、物の骨組、物の分量を逸早く看取するので、この點からいへば寫生法の一つともいふことが出來る。併しここでは圖案に用ひる場合として、物の看取を試みるもので、これは、先づ第一に骨組、第二にこれの肉付を必要とするものである。骨組は物の組立てであり、肉付は物の分量の看取である。この意味を以つて物を見、物の特徴を捉へた時に略畫が出來上る。よつて、物を寫生せんとする時にはこの略畫の精神をよく學ぶべきである。即ちこの精神で略畫を行ふ時には教本に示してある通りに第一には物の運動の骨格を見ぬき、第二にその物の分量の看取を行ひ太さや肉の分量等を描き、第三にやゝ詳しく物の說明を試みるのである。故に繪の初學者に於ては、先づこの略畫の方法を度々試みることによつて次第に物の寫生に長じ、畫技を熟達せしめることになるのである。

圖　案（一三、應用圖案　その一）

圖案の意義　純正繪畫を別として、我々が裝飾の用途のために美しい物を求めるのに、圖案といふものがある。そこで圖案とは何であるかといふことを一應述べて置く必要がある。

人々は簡單に圖案といふものの、その意義に關してはこれを明白にしてゐるものは少い。或人は圖案を以つて裝飾の意義であるといひ、或人は考案の設計であるといひ、又或人は美の設計であるといふ風に種々の說をたてるけれども、誰にでもわかり易いとする說なるものは容易にたてられぬと見えて、圖案を眞實に說明するものはまだ見當らないのである。

故に筆者も圖案といふものを說明するに當つてそれは尙不充分であるとは思ふけれども、やゝ何人にも首肯し得るものとして圖案の意義を幾分闡明して置きたいと思ふのである。筆者の考へる限りでは圖案を廣義と狹義との解釋の二つにとり、廣義では考案を圖式にて示すものをいひ、狹義に於ては、考案を基にして、物の美的設計をなすものであるとするのである。

それといふのは、今人々が机が欲しいと思つて紙上に机の圖を描いた時は、それが美であらう

が無からうが、人々はこれを呼んで圖案と呼ぶし、又機械等の設計圖、廣告のための一場面の圖でも圖案と人は呼んでゐるのである。かやうな時は筆者はこれを廣義に解された時の圖案とするのである。これに引きかへて、物が美しく出來、少くとも藝術的な美を示して、人々に美として鑑賞されるやうなものを作るべき圖上の案を以つて、これを狹義の圖案とするのである。何故ならばその圖案では人間の美の嗜好にかなひ、人間生活の裝飾として價値あるもので作られるからである。この時では圖案は明らかに狹義となつてゐるのである。故に圖案には二つの用途があると見てよいのである。

應用圖案　今、商業美術の場合では廣義に用ひられる場合もあるし、又狹義に用ひられる場合もあるのでこの二樣の說を必要とするのである。而して、今美なる目的のために作られてゆくやうな商業美術の場合では、これを應用圖案と呼んでもよいのである。卽ち描畫する畫材が皆美の何等かの役目を果すために用ひられてゐるので、これを應用圖案とするのはけだし當然である。この解釋あつて後、ここにはじめて應用圖案が說かれ、その應用圖案の中に影繪の應用が說かれるのである。

影繪圖案　影繪は圖案技法としては初步に屬すると前に述べたが、影繪はその表現は比較的簡單であるだけに扱ひ易いのである。卽ちこれを資料として圖案することは簡單である。それで、この圖案の應用される方面を求めて見ると、商業美術の中にも仲々少からずあることを發見するのである。卽ち物象を影繪式にして示すもので、これは教本にも示してある通りに廣告のカットとして、看板の圖案として、壁の圖案として、その方法は多樣に見出されるのである。これを古代に求めて見ると、コリント式のギリシヤの壺の裝飾の模樣は、全くシルエット風の圖案であり、一種獨特の風致を存するものである。又、この圖案で特異の才を示したものではドイツ人のシー・エフ・パルテルがある。

圖案の模樣（一四、適合圖案）

圖案の形式　圖案は先づ模樣創作の方法として、種々その形式に形相の變化をつくる。故に圖案を修めるはじめに當つては、先づこの圖案の種々な形相の方式について學ぶことが必要である。今ここに擧げた適合圖案なるものも、要するにその中の一つであつて、適合圖案なるものは一定の區劃の中によく圖案が適合するものであつて、教本ではその形式を作るに對比、律動、從屬、均齊、連續、集中等の各種の形式が生ずることを教へてゐるのである。これは圖案が單獨で考へられる場合でもこの方法が屢〻必要なのである。そして、この適合の方法が完全に修得され

た後にこれを基礎として組合せ或は構成する場合に模樣の成立を見るのである。故に圖案を作らんとするものは先づこの適合圖案に習熟することから始めなければならぬ。そして適合圖案は模樣を一定の區劃の中に適合するものであるが、模樣を單獨なものとして見る場合は左記の如く區別されるのである。

單獨圖案 ｛當嵌模樣／氣好模樣｝

當嵌模樣は卽ち物をあてはめる模樣であつて、適合の模樣といふことが出來るのである。これは一定の區劃の中に物を當嵌めるのであつて、この當嵌の場合は、その當嵌め方に二つの場合が生ずる。卽ち塡充模樣となるものと點裝模樣となるものである。

塡充模樣とは物が一パイに塡充された意味を表するので、この種の圖案では重々しく華かに豪壯な感じを示すものであり、點裝とは一定の區劃內にあつても、たゞその所在を單に示すに過ぎないものである故、區劃內の模樣は輕くあつさりとしてゐて、一見物さびしくやさしく見えるものである。

この表現の二樣によつて、先づ適合にも種々の形のあることが知れる。

圖案の應用（一五、應用圖案　その二）

圖案を應用するもので、最も手近にあり、且つやさしいものでは手拭の圖案をあげることが出來る。これは色の關係も少く、圖柄も簡單である故、圖案練習の方法としては最も手輕な一つの手段であるかも知れぬ。且つ商業美術の方面から考へても關係淺からず、配り手拭、景品手拭といふ立場からも是非練習して置くべき性質の物である。

手拭の故事　手拭はたのごひともいひ、支那三代の禮浴に用ひられたといはれてゐる。我が國では奈良朝の時からであつて、盛んになつたのは平安朝からであるといはれてゐる。はじめは大嘗祭の御供物に供へられ、仁王經講師湯中に、釋尊の器物を淸めるために、剃髮を受けるために、汗拭のためなどに用ひられて、地質は白地布で、寸法は三尺、四尺、五尺、六尺、八尺、九尺、一丈、一丈三尺等種々あつたといはれる。

戰國時代ではこれを頭に卷き、或はこれで人を縛り、又入浴、汗拭、手水等の場合に用ひた。

江戸時代に入つてから大衆的となり、上下均しく愛用して、浴布、汗拭、手水は勿論、贈物として、火事見舞、餞別、引札、年玉、儀禮用等に用ひ、家の標章をつけては宣傳用に、技藝上に

は種々雜多の用に供せられ、殊に物見遊山に用ひ、腕引き、頸引き用具に供せられ、土產品に供せられる等、實用上もその用途は頗る多かつた。

手拭の地質に於ては古くは太布、晒麻布、後には木綿を用ひるやうになり、寸法は三尺手拭から、元祿時代では五尺のものが用ひられた。江戸末期には鯨尺で二尺五寸であつた。色は赤、紫、淺黃等が多く、染分もあつたが、時代によつて種々であつた。芥子玉絞り（白地藍絞り）は江戸末期の好みで、紋樣は笹や車や文字文樣等があり、友禪手拭では風景、花鳥、動物、人物刷等があり樣々であつた。

ポスター（一六、應用圖案　その三）

ポスターの表現　ポスターは圖案ともいへるが、又考へやうによつては特殊な繪畫道だといふことが出來る。といふのは、勿論考案を一つの畫面上に示すものであるけれども、その表現は所謂圖案の一定の法則にあるのでなく、物によつては、どこ迄も繪畫と同じやうに自由に作者の思惑を表現するものであるからである。であるから、これを描かんとするものに對してはその作者の思ひの儘に任せてよいのである。

しかしたゞこれを目的の效果の上から考へて注意して置くことは左の如きものである。

(1)　ポスターが廣告に用ひられる場合にあつては、どこ迄も廣告主の心持になつてポスターを作ること、廣告主の心持は又どこ迄も買主の心持になつてポスターを作ることである。そこで、

(2)　ポスターは誰が見ても親し味のもてるやうなポスターであることが必要であり、これを描かんとするものに對してはその作者の思ひの儘に任せてよいのである。

しかしこれを目的の上から考へれば、目的によつてその描方を工夫しなければならぬことは勿論で、この點について若干の指導が必要となるのである。今目的について、ポスターの範圍を調べて見ると、政治ポスター、催物のポスター、遊覽地案內ポスター、敎化ポスター、商業廣告のポスターと種々の範圍に區別される。學生として興味あるものを求めて見ると、運動會のポスターや學藝會或は展覽會のポスターが、生活的にも近接してゐるので、敎材として採るのには最も適してゐる。

故にポスターについて各々の製作表現上の詳しいことは上級の場合に讓るとして、現在ではポスターに對する畫作興味を中心としてこれを課する方が生徒にとつても面白いと思はれるので、そしてこの製作に於ては構圖の採り方や、繪具の扱ひ方等について、習熟を求めるので、餘り大きな期待は持てないと考へなければならぬ。

尙この際に時間の餘裕を見てポスターに關する常識ともいふやうなものを述べて置くことも必要である。

ポスターの語義　ポスターは Post（抗打ち）といふ文字に er をつけたもので、物を貼りつけるといふ意味を示すものである。これは專ら英國や米國等で用ひられてゐる言葉で、國々によつては、多少言葉やその樣子が違ふものである。ドイツでは、この種のものをプラカート Plakat といひ、紙のみに限らず多少耐久的に出來てゐる揭示用の廣告物をも指してゐる場合がある。フランスでは、アフイシュ Affiche といひ、貼りびらといふ意味があり、我が國でも貼りびらといふ言葉が用ひられてゐた。

それでこの種類に屬するものは要するに物に貼りつけられる廣告印刷物を指すのであるが、現在の我が國ではポスターは貼るものとは限らず、一定の形式のある色刷の廣告印刷物で、吊り下げるものもこの中に入れてゐるのである。

そして、大きさについては、我が國では、二尺六寸（78cm）に三尺六寸（108cm）位が最大であるが、米國では、横二十六吋に縱三十六吋を單位にして、それの二枚つゞき、三枚つゞき、四枚つゞき、六枚つゞき、八枚つゞきといふやうに大きくして、最大二十四枚つゞき、といふやうな大きなものを貼りつけるものまである。これは我が國では雨量が多くて雨ざらしに耐へぬ故と建築物が小さいといふことの故でもあるが、國情によつて、それ〴〵趣きを異にしてゐる。卽ち我が國では吊り下げるものとして發達し、外國では貼りつけるものとなつてゐるのである。この

ポスターの發達　ポスターといふものを大體我々が知るやうになつたのは、歐洲大戰中であつて、我が國でも再三戰時ポスターの展覽會があつてから、ポスターといふ言葉を覺えたのであるが、それ迄は、我が國では貼りびらといつてゐたのである。このポスターが元來發達した元はといへば、平版の印刷が發明されて所謂石版印刷で色刷が出來るやうになつたといふやうなことが原因してゐる。

それ故このポスターの起源は左程古いとはいへないものである。

西暦一七〇六年頃ドイツのアロイズセネフエルダーといふ人が石版術を發明してからフランスのユウスシエレーといふやうな人が石版術を學んで、これを應用して色刷のポスターを作つたといふやうなことがいはれてゐるから、ポスターは所謂石版術卽ち平版印刷の發明以後からだといふことが出來る。しかしその前にもポスターが無かつたかといふことは出來ない。

言ひ傳へられてゐる所によると、ポムペイの廢墟の中からもサインボードとしてポスターらしきものが發見されたといふし、ギリシヤやローマの時代にも決鬪の廣告などに使はれたといふことがある。但しこれは勿論印刷されたのでなくて描いたものが多いのである。

或人の說によると、元來ポスターは芝居の繪看板がはじまりだともいはれてゐる。その意味で見ると、我が國の繪看板などはまさに立派なポスターの性質を備へてゐるのである。

兎に角、ポスターといふものは繪柄によつて、文句ではいひ表はせないことを人々に知らせようと試みるものである。それ故、これは繪といふものが實用に供せられたといふことからも發達したといへる。繪であれば國境を越えても、老若男女の差別なく、言葉の通ぜぬ人々にも物を知らせることが出來、便利である故、廣告の手段に用ひるものとしては最もよい武器だからである。故に印刷術の發達以後はこのポスターは歐洲各國に發達し、特に大戰當時から盛んになつたものである。

引　札（一七、應用圖案　その四）

引札　圖案の應用はその用ひる所によつて、範圍は限りない。商業美術では廣告印刷物といふものが主で、ポスターはその最たるものであるが、引札も一寸した廣告印刷物としてはよく利用されるものである。

これは大廣告主も利用するが、大廣告主よりも、むしろ小商店の人々が、賣出しや開業案內等に用ひることが多い。特に中元や年末に用ひられ、近邊の住民や通行の人々の注意を惹くやうに計畫されてゐる。しかしポスターと違つて、主として、賣出しの內容を知らせようとするのが目的故、文句が多く使はれてゐるのであるが、引札を是非見させるといふ工夫のために繪を施し、圖案をすることも大切とされてゐるものである。

故にポスター圖案の下稽古として引札の圖案といふやうなことを試みて置けば大變に便利で、これは一擧に兩者の勉强になるものである。

引札の圖案　それ故、引札の圖案を應用圖案の一つとして、ここに課したのであるが、この引札の圖案の作法はポスターと同じやうに廣告の印刷物として、適當に作者の思ふ通りに使つて差支ないのであるが、色數を餘り澤山用ひぬこと、圖柄の簡單なものを選ぶことが大切である。圖柄の資料としては、なるべく季節に向いたものを選ぶのがよいので、その意味で年末はクリスマスに因んだものを示したのである。

圖案の資料　引札の圖案を資料の點から考へると、

(1)　輪廓を主として工夫するもの。これは引札を上品にし、引札を立派に見せる意味で用ひられるものである。

(2)　商賣用の商品の圖をカット（人の注意を引く畫）に用ひるもの。これは營業用として營業

の目的をハツキリ知らせるために用ひるもので、帽子のカツトを用ひて、帽子大安賣といふやうなことを表示するために用ひられるものである。

(3)　季節向きの景題をカツトに用ひるもの。これは教本に示したやうなもので、人々が物を買ふには時季時季によつて、その季節のものを買はうとする心がある故、その季節のものを用ひることを主にしたものである。つまり人々に季節を思ひ出させると共に、引札その物も人の目を惹くやうに作るものである。

季節と商品との關係を考へて、資料の範圍を考へると左の如きものである。

一月　門松、干支に因んだもの、めでたいもの。これは何商賣でも向くものである。

二月　初午、スキー、雪、梅

初午や梅は菓子店向き、スキーや雪の圖は洋品店向き、特にスキーは運動品の店に好適のものである。雪はストーブ店、梅は呉服店等にも用ひられる。

三月　雛、桃、春の野山

雛、桃は玩具店、菓子店、食料品店、春の野山は呉服、履物、洋品、その他何にでも向くものである。

四月　櫻、入學姿、春の野山、小動物

これは大體三月と似たもので、櫻は春の呉服、洋品、食料品に、入學姿は文房具店に、小動物は玩具、菓子、子供向きの商品に好適である。

五月　雨、菖蒲、五月人形、青葉、鯉

五月は主として雨季をめがけたものが多く、レインコートや雨具の賣出し、五月人形の賣出し等に用ひられるものである。青葉は何店でも應用が廣い。

六月　新綠、初夏の野山

この季節はハイキングの季節であるから洋品店等が活躍するもので、洋傘履物店等に應用の廣いものである。

七月　海邊、船、登山

七月になると、夏の氣持がハツキリして來て、すべてのものが爽快となる。從つて、引札にもこの心持を以つて、海や山邊の遊びをとり入れたものが適し、運動用品に、夏物にこれ等の題材が適當するのである。

八月　海、夏雲、月

八月は七月に引きつゞいて夏の氣持を見せることが必要で、景物も矢張同じやうなものが使はれるのである。

九月　月、薄、雁

九月は秋であるから秋の氣分にふさはしいものがよく、これは呉服店、食料品店等何店にでも向く資料である。

十月　紅葉、芋、鹿、菊、スポーツ

十月になれば秋も酣となり、食料品店等は最も活動するによい時季で、秋の散策にかけて、自己の商品を宣傳するによいのである。

十一月　菊、雁來紅

十一月はもはや冬にも近く、營業もしまつて來、引札にも莊重な氣分がよろこばれるもので、これ等の題材が適するものと考へられるのである。

十二月　冬籠、サンタークロース、クリスマス、冬山

十二月は新年の用意に意を用ふべきであるが、季節としては寒さを思はせることがよく、クリスマスのものなぞ、題材として好適である。

(4)　文字に工夫をして、文字の面白さによつて、引札を考案するもの。これは、引札の趣向を圖柄だけによらず文字の工夫によつて人目を惹かんとするもので、文字を大きくするとか、文字の恰好を圖案するのである。

(5)　引札の恰好に新工夫を加へて、種々の新案の趣きを示すもの。これは普通の引札では人目にもつかぬし、平凡では印象に残らぬといふ立場から、引札の様子に新しい工夫を加へるものでこれはノベルチーと稱し、圖案といふよりも、形その物の考案になるものであるが、これも引札の案として考へられるものである。

年賀用繪葉書と木版畫（一八、應用圖案　その五）

年賀用繪葉書　年賀用の繪葉書も圖案の應用であることはいふ迄もない。殊にそれを商人として用ひる場合は變つた圖案によつて人々の注意を惹けば、一種の廣告の目的ともなり、親し味を深めるためにも役立つものである。故に繪葉書圖案の考案といふことも、圖案を修得する上からは平素の用意として試みてよいものである。

版畫の知識　これを實際に役立てるといふ試みから屢〻木版畫や芋版のやうなものが、簡易な方法として應用される。學生に實習させるものとしてはこの種の版の技術に通ぜしめて置くことも無駄ではない。よつていささか、簡易な版畫の知識をここに加へて置くことにする。

「版畫とは彫りと摺りとによつて表現された繪畫の一種である」と創作版畫家協會の平塚運一氏

はいつてゐる。それ故、版畫といふものを獨立的に扱はうとするならば、版畫は版畫としての特別の領域で、その認識を深めてかゝらねばならない。同氏によると、版畫の面白味は、版畫を生かすところにあるので、版畫は版畫の持つて生れた性格、即ち、木版畫ならば描いた線や點でなく、削り出した、彫り出した線や點にあり、或は削り殘しや、彫り殘した線や點にあつて、その双物によつて作られた線や點や面が面白いといふところにあるのである。故に版畫のみを一つの藝術として行はうとする人は、この面白味やその他木版畫創作に於て特有に出てくるバレンの働きといふやうなことを理解することが必要である。しかし商業美術の學生にはそれ程深く趣味的に偏する必要はないが、情操教育の上からいへば、この點も考へて置くことは必要である。

版畫の材料　版畫を行ふに當つては、先づ版畫を作るところの材料を知る必要がある。材料としては木に彫らないものとしてはリノリユムや芋などを用ひるのもあるが、これはホンの子供のあそびに類したもので、先づ版畫の一般常識としては、櫻か朴か桂等を用ひるのである。朴はいくらかねばり氣があつて肌がこまやかで大變彫りぐあひがよいとされてゐる。しかし材料は何もこのやうに制限しなくとも、自分の手近なものは何を用ひても差支ないので、その點は作者の自由に任せてもよいのである。

木版用の双物　版木の次には版を作るところの双物であるが、これを正式に揃へるとすれば次のやうなものが必要である。しかしこれも簡單にすれば切出しと、丸のみの二種位で、他は略しても大體は出來るので、學生にはその必要を強ひることはないのである。よく切れる小刀でも版畫の氣持は味へるものである。

双物は

切り出し　彫刻刀で筋彫りに用ひられるものであるが、普通の小刀でも間にあふ。

間透（あきすき）　これは一番から六番迄の大きさの差があるが、平たい形で浚ひに用ひられるものである。

駒透（こますき）　半圓形の内側に鋼の双のついたもので、小さな部分を浚つたりするものである。双幅三厘から一分迄。

丸のみ　駒透に似た双幅一分五厘から五分迄で、駒透と同じ役向をするものである。

相合のみ　これは間透に少し厚味と丸味を加へたもので、矢張浚へに用ひられる。

見當のみ　これは色刷の目安を彫る場合に用ひられるものである。目安とは、色刷の見當を彫る場合をさすのである。

彫りが濟んだならば刷りの用意であるが、刷りには、バレンと刷毛と、繪具とを用意しなけれ

ばならぬ。

バレンと刷毛　バレンは、竹の皮で包んだ一種の簡單な刷りの用具で、これを印刷用紙の上にあてゝ押捺して、刷りあげるのである。

刷毛は版を刷るときの繪具を版につけるために備へるものである。これは買つた儘では使ひにくいから、平素使ひ易いやうに、自分で作りかへる必要がある。

繪具　繪具は、大抵なものが使へるが、性質の異つた繪具同志をまぜ合せる時はうまく溶け合はぬので、なるべく同じ性質の繪具を用ひることが必要である。

西洋のインクを用ひる場合では活版のインクが最も適當し、謄寫版用のインクは絶對に用ひてならないものである。

用紙　刷りに必要なのは紙であるが、版畫に最も適する紙は、どうさを引いた柾とか奉書の紙が最もよく用ひられる。しかしこれもこの紙に限つたことではないが、日本木版では版畫としての適應から矢張り日本の紙が尊重せられるのである。

版畫の實際　版を作るのには先づ版下を必要とする。版下といふのは、版を彫る時の目安或は心覺となるもので、版の原畫である。この版下はどうさ引の薄美濃紙或は圖引用紙の薄いのに描いて裏返しにして板に貼るのである。そしてこれを辿つて彫刻刀で彫るのである。この時に薄い紙を用ひるのは、厚くては繪がよく見えないからで、又裏返しに貼るのは、版を刷つた時に左前にならぬためである。

一色刷の時はこれでよいが、多色刷即ち色摺りの版畫を作る時では左の順序が必要である。

(1)　先づ墨線の版を彫る。そして繪の左下へ『形、右下へ一の字形を見當をつけるために彫りつけて置く。これは摺る時に紙を當てる場所で、紙をあてるだけの段を作つて彫り下げて置くのである。左のを鍵見當といひ、右のものを引きつけ見當といふのである。

(2)　これで最初の下圖が出來るが、これに色のものを用ひるとすれば、その必要だけの版を同じ樣にして彫らねばならぬのである。即ち三色ならば三枚、五色ならば五枚といふ樣に版を必要とするのである。そしてこの色を加へることを色さしといつて、この色さしは別の版木に、色の部分だけを彫り殘して、他を浚ひ落すやうにすればよいのである。尙この場合にも見當は矢張り彫つて置く必要があるのである。

以上は錦繪のやうに墨の線があつて、種々の色の入つた版の場合であるが、一部に主要な線描が働いて他は色のみを用ひた場合では最初に彫るものは前述の通りであるが、この時に無駄彫りといつて、色のみの個所にも線の輪廓があるものとして、假の墨線を彫つて置いて、それを色の版下を作る時の色の境界をするに用ひるのである。

又、全部が線を用ひず、色ばかりで、つまり色の塊りばかりで出來てゐるものではその畫の大部分を占めてゐる主要な色の版を最初に彫り、それを薄い紙に摺つて、次に來るべき色の部分を朱か何かで描き加へて、第二色目の原稿にして、これを彫り、彫り上げたならば、最初の色と第二のものとを一枚紙に摺り込み、それに第三の色さしをして摺り、順次にこの方法を重ねて行くのである。

尙この摺りに於て、色のかけ合せといふことが屢ゝ行はれる。色のかけ合せといふのは、最初に摺つた色が黄であるところに、次の版が青の版である時、そこに綠の色を見出すもので、これを利用するとすこぶる面白い結果が得られる。しかしこれは餘ほど注意をせぬと案外效果の擧らぬもので、初めに青で摺つたものの上に、黄色で摺つても、豫期した效果を見ないものがある。故にその點を考へて見なければならぬ。これは平版印刷の場合に出て來る色刷の關係である。

文字の圖案（一九、文字の圖案）

文字は明瞭に讀めることが必要である。しかし商業美術にあつては、趣向をこらして、人目を魅惑するやうに作られてゐることも必要な場合がある。即ち裝飾の必要を感ずる時や、看板の文字として印象を鮮やかにするために、文字に意匠を施すことは屢ゝある。故に圖案として文字を工夫することに留意する。

文字を意匠するために簡單な方法を採るとすれば、普通の圖案法に從つて、先づ文字の立體化といふやうな方法から入れば自然目だつた文字を作ることが出來る。教本によるものでは最上段は木彫の文字に象つたもので、左上方の三字は角型に影を作つたものであり、その右は斜めに切り落した姿を備へてゐるものである。第二段目では自然木の丸太の儘を文字の形に借りたものでこれは樹の枝の儘を示して居り、第三段目は紙を折り曲げた形に示されたものである。凡そこれ等は實形のいろ〳〵の姿から趣向を得たもので、工夫の方法によつて、學生にもそれ〴〵新しい工夫が生れるもの故、種々の材料を提供して文字の圖案を試みさせることが一つの方法である。

文字の圖案はこれにとゞまらず、その方法は多種多樣であるが、すべては一般の圖案と同じく便化、單化いろ〳〵の方法によつてその姿を得るので、これについては尙上級に於て圖案の技術を得てから種々の方法も考へ得られるので、ここでは先づ文字の立體化だけを主眼として工夫することにとゞめるのである。

教本の四段目、五段目では色の施しやうによつて文字の美しさを示したもので、これも要するに一つの圖案である。

包裝容器（二〇、應用圖案　その六）

圖案の應用は平らなものばかりでなく、立體的なものにも試みられるものがある。

ここに掲げた包裝容器はその一例で、所謂瓶や罐の容器や函の形を考へることも圖案であり、商業美術としては、商品の美しい姿を整へることが、店頭での賣上を增すことを思へば、その體裁を考へることは相當重要と考へられるのである。

これ等の圖案にあつては、容器の全體の形の工夫が、見よく體裁よく出來てゐることが考へられ、レツテルや外裝の全體の色調や模樣を工夫するところに重心が置かれてゐるものである。故にここでは文字の圖案と模樣の圖案を應用せしめて、種々の構想を試みさせることが必要である。又形によつては文字の適合や模樣の適合等をも試みるべきで、包裝容器のことについては上級で尙學ぶとしても、初年級では各種の方法が先づ必要であることを悟らしむべきである。

包紙と看板圖案（二一、應用圖案　その七）

圖案は物の目的や用途によつて、その意匠のたて方を異にするもので、ここに示された包紙と看板では、兩者が對蹠的な取合せとして比較的にわかり易く圖案の用途を暗示するものである。

即ち包紙では商品を包んで客に與へるものである故、包紙は上品で、而も人目につくやう工夫され、看板は遠くから見ても一見してそれが何屋であるかを明示するものでなければならぬといふ條件に置かれてゐるものである。故にこれを圖案するに當つては、この目的を貫徹するために圖案するもので、包紙には配列的な圖案、模樣を作るやうな心持がよろこばれ、看板では構成的な或は統一的な構圖を作ることに重點を置くのである。これによつて學生は一方は總體的な賑やかな圖案の工夫に慣れ、一方は統一的細部的な圖案の構成といふことに心が用ひられるのである。

故にすべて圖案をするといつても常に目的と用途によつて工夫の方法が違ふと共に種々の心遣ひが必要であることを悟らしめるためにこの二者の圖案の道を示すものであつて、これのみに限らず凡そ圖案家の心得をこの僅かなものの中にその主眼を含めたものである。包紙や看板の概念については、いづれ上級で說明されるところはあらうが、今は基礎として、先づ圖案には何を心がけて行ふべきかといふことが考へられてゐなければならぬのである。

マッチレッテル（二二、應用圖案　その八）

圖案をするものにとつて必要なことは、常に構想を豐かにするために種々な考案の參考材料を集めて置くことである。その意味ではここに示したマッチのレッテルは蒐集の材料として手頃のものである。凡そ圖案に先だつて必ず心に浮ぶ圖案の面影は何等かの型を求めることであつて、それには何人かが行つた良案が得られるならば、自分もまた工夫を速かにたてることが出來るものである。それ故平素から心がけて商業美術のよき參考となる材料を蒐集して分類し整理して置くことを先づ初學年の間に計畫しなければならぬものである。

マッチのレッテル圖案は甚ださゝやかなものであるが、これは用ひどころによつて、ポスターの案ともなり、引札や新聞廣告、扨ては案内狀の表紙にも適切となるものが少くなく、色の調子を考へたり、構圖等を學ぶのにはよき材料である。よつてこの蒐集は先づ商業美術の興味を增す上から考へても是非行ふべきことで、それと共に、これ等のものを模寫し、或はこれによつて考案をたてること等が行はれるならば、一層の效果を增すものである。故に蒐集の習慣を增す意味からこれ等への關心のために教本に附加へて、その興味のもととしたのである。

ペン畫（二三、ペン畫）

現代の商業美術で最も多く需要されるものはペン畫である。ペン畫といふものは鐵製の筆を以つて墨汁でケント紙或は硬い畫用紙に描くもので、描法が簡單なのと、その出來上つたものが現代の製版術中の亞鉛凸版等によつて再現することが出來るからである。故に現時の新聞廣告或は雜誌の挿畫等では專らこのペン畫に賴るものが多く、從つてこの描法は實用畫としては等閑に出來ぬものである。

ペン畫はペンの性質によつて、その描法に密なものも極く粗いものも出來、放膽緻密等は隨意で、その意味では頗る面白い畫趣を持つものである。今一般に廣告用として用ひられてゐるものでは商品の圖を示すもので、正確に商品を寫して、商品の面影を傳へんとするものである。即ち教本に示すが如きもので、この描法も異つたものでは線を點に代へて示したものや、或は線の錯綜によつて面白味を見せたもの、その種類は種々雜多である。故に趣味として行ふにもよく、實用としても簡便である。

またカットとして用ひられるものもこのペン畫でこれは圖案風にして面白き風致を示すもので

ある。

そしてこれ等ペン畫の練習は、要するに、寫生を忠實にして早くその實體を傳へることに慣れるべきで、これには最初寫眞等を手本として、その陰影の調子をよくつかんで描くべきである。

ハーフトーンの繪畫（二四、ペン畫とその應用）

ペン畫と同じく現在の製版に合つて廣告畫及び挿畫の寵兒として利用されてゐるものにハーフトーンのある繪畫といふものがある。

ハーフトーンのある繪畫といふものは一色であつて、その畫面に陰影の調子があり濃淡をよく示してゐるものである。細密なものでは一見して寫眞の如き有樣を示すもので、このものも商業美術の實用畫としては相當の需要を示してゐるものである。

これはペン畫と違つて、版が寫眞網目版によるものであるけれども、陰影度の調子が立體感を明らかにする故に一層の面白さを示すもので、人物、器械、建築、器物等の表現に持てはやされるものである。

この描法はペン畫よりやゝむづかしいが、大體水彩畫を描く心算で、筆によつて調子の濃淡をつけて、明るい部分と暗い部分とを加減して描いてゆくならば、思ひのまゝのものを得ることが出來るのである。

尙この描法を二樣或は三樣程度の明暗の差に區別して、筆を平らに一樣に圖案的に使へば、教本圖の下段に或は同じ教本のカットの自動車に示すやうに圖案味のある畫趣を得ることが出來るのである。

かくして廣告畫の表現にも多種多樣のものを得て、それ〴〵面白いものを得ることが出來る。故に學生にこれを學ばしめることも一つの方法であるが、餘り多樣となつては、生徒にも得がたい筋も出來る故、その邊手心して、大體の常識を與へて置く程度でよいと信ずるのである。たゞ將來專門家としてたゝんと志すやうな人々にはこの方面への習熟にもなれさせることが必要である。

立體構成（二五、組立と組合せ）

立體の構成　これ迄の所では商業美術に如何に畫技が必要であり、且つ圖案といふことを如何にして習得しなければならぬかといふものを教へるのであつたが、商業業術はその實用の方面

に於て、陳列窓の造型とか店舗の設計或は看板の工作といふやうのなものの迄をもこなさなければならぬ故に、立體物の造型に關する技術をも大體會得して置かなければならぬ。それには學年の間ではむづかしいことや複雜なことは要せぬが、大體立體物を作り上げる基本概念を作るといふ意味から立體の構成に慣れさせて置くことが大切である。それ故に多少小學校邊で試みたやうな手工の類に傾くかも知れぬが、色紙を用ひ或は積木細工の器物のやうなものを用ひて物の組立を作り、相互の關係や組立てた場合の工作の關係を考へさせることが必要である。

教本で示したやうに色紙を適當に貼りあげてゆくことは將來陳列窓を工作する時に背景を作る時の資料となり、色の相互關係、物の形の相互關係を知つて工作の興味を一層增さしめるものである。立體に於ては量と量との關係、立體物となつた時の量の表裏、側面、背面、仰面といつたやうな第四次元への認識を深くせしめて、物を一面だけで考へるやうな平面的圖案の考へから一歩を脫却せしめることとなるのである。故にこの時間の教育は先づ手工的なことを試みるものと考へて、立體の構成に重點を置き、どこ迄も生徒の立體構造に對する養成を考へるやうに努力しなければならぬ。

それ故これは紙片の貼付細工だとか、玩弄品のあそびであるといふやうな考へを捨てゝ生徒の持つて生れた純眞な氣持を尊重して、その造型工作の方面の才能を導き出すやうに心がくべきである。生徒の中には繪は拙いが、案外工作や造型の方面に異常な才能を示すものもある故、それを極力伸ばすやうにすることも商業美術教育の一つの使命であり、それが實用に當つて役立つ基ともなる。商業美術はたゞ繪を描くといふだけが主眼でなく、どこ迄も才能の誘發と、人間の美的工作の方面の實用化である故、この仕事は頗る大切と考へなければならぬ。これについては一方に於て、手工を以つて立體構成を行ふと共に、一方にては、實際の社會にある、建築や立體物を見學させて、それ等のものが如何にして出來、如何になり立つてゐるかといふことを見學させることも勉强の一つである。若しこの種の立體構成が巧になつたとしたならば、將來建築やその他の立體物の工作に從事する人も養成することが出來る。

且つこの構成の如何によつて、物の作り方に深味をつけることも可能である。

殊に陳列窓といふものを修めるためにもこれは初學年に於て是非學びとらしめて置かねばならぬものである。故に、立體構成の仕事を行ふと共に、それに附隨して、この立體物の製圖法を大體教へることが必要である。ここでは用器畫法は試みてゐないが、先づ繪畫として立體物の描寫といふやうなものを練習させることも必要である。

先づ物を立體的に見ることがこの場合に於て習得すべき重大な要點である。

構圖の構成（二六、構圖の取り方）

立體の構成について必要なことは、先づ物を組立て組合せても、それが出鱈目であり無考へに出來るものであつてはならないことである。ことにこれを作るときに一つの方便ともなるといふことは、物を如何にして作るかといふことであつて、それには物の美的構成を教へることが必要である。

ここに於て構圖の採り方といふものが研究され、如何なる組立てが見た眼には感じよきかといふこと、それが必要である。

見た眼に感じよき物の組立ては陳列窓の裝飾の場合等特に考慮される。これによつて、先づ物の釣合の關係、物の相互關係を整理することを教へるもので、組立に於て、よい關係は如何なる場合かといふことを發見せしめることに努力を要するのである。

故にこの場合は物を描くといふのでなく、物の配分の仕方、物の組合せの關係、物の組立、順序位置、濃淡、高低といつたやうなものについて考へさせるやうにするのである。

故に教本でも示されてある通りに、物が同じ物ばかり並びたつてゐる時では統一はあるけれども平凡であり、又、高低があつて、相互の關係に無關心であつては面白くないといふやうなことを自然と會得するやうに仕向けるのである。且つ人の目を統一して一點に向けしめ、物の組合せを面白く見せるためには如何にすべきかといふために、變化や律動の大切さをこの場合に教へるのである。故にこの時間では、物體製作の美的觀念の養成といつても然るべく、すべての物を見る眼を養ひ、物の相互關係の面白さを吟味することに努力を拂ふのである。かくして商業美術はたゞ物を描くといふことだけに終らず、物の作り方、美しさの感じ方といつたやうに自然と眼を開いてゆくのが主眼である。

この實習が實際によく解つて來るならば、上級に於て行ふ圖案の考へ方、變化や統一といふことの必要がよくわかり、自然と圖案の道も悟るやうになるのである。

繪の見方（二七、繪の見方）

以上は生徒の實習に、或は工作に、或は實地見學によつて、その腕を磨きその眼を開かせることに努力したのであるが、根本の要點としては商業美術の精神を把握することにその全體の力を用ひなければならぬ。その意味で、これより以後は指導者は少しく面倒であるかも知れぬが、講

義によつて、先づ繪の見方といふこと、美の解釋、美と人生といふやうなことを說明して、美といふ事が、如何に人間生活に必要であるかといふことを理解させなければならぬ。そのために、教本ではこの最後の頁を鑑賞教育の材料に大體繪の見方といふものに割いてゐるのである。

繪の種類　一口に繪といつても、繪もその種類を區別すると、實に廣汎な領域に亙る。

說明に用ひられる繪は圖解用の繪であるし、見て樂しむ繪、笑はせるやうな繪は漫畫であるし、物を美しく飾るやうにするものは飾り畫、商業美術のやうに廣告の目的に用ひられるものは廣告畫である。所がここに美術として考へられる畫はどんなものであるか、

繪の見方は先づ美術の見方からして理解されなければならぬ。

美術の見方　普通の人々には美術といふことと普通の繪といふことの區別をよくわきまへてゐないために、その畫のよし惡しが不明な場合がよくある。

繪を美術として考へた場合には、繪にはそれを描いた人の人格といふものが加つてゐなければならぬ。そして繪のよし惡しといふことはその人格のよし惡しによつて定まるものであると考へてもよいのである。

普通繪のよく出來てゐるのは實物に近く、如何にも本物らしく描かれてゐるものをよく出來た繪であると思ふ人があるが、如何に實物の通りに描かれてゐても、人間といふものが關係してゐなくては、繪として讃める譯には行かぬものである。

物が實物の通りに示されて居ればよいといふならば、寫眞で物を示したものもよい筈である。しかしこれを繪といふ譯には行かぬ。それは何故かといふと、これは機械が作り出した物の姿であつてそこには人間といふ物が働いてゐないからである。機械で表現されたものは結局機械だけで、誰が作つても同じやうなものになる。繪の價値といふものは人間味の加はつたものでその價値を見出すものである。人間が關係しなければ現はせぬものを持つてゐてはじめて繪といへるのである。即ち人間が關係して示せるものは思想、筆技、配色、表現の仕方等で、繪は題材の立派さや筋を說明しただけではまだ繪としての値打を定めることは出來ないのである。

そこで繪を見る場合には、表面の繪を見るよりもその底にある人間の示してゐるところの力を鑑賞して見るのである。即ち繪の見方といふものがあるのである。

繪の見方　繪の見方といふものは、人間味といふものが加はつてゐなければならぬのであるから、先づ繪に表はれてゐるところの人間性といふものに重點を置いて見なければならぬ。即ち人格の力を見るのであるが、この人格といふのは何も普通に考へられてゐるところの道德的な人格をいふのでなく、その人でなければ現はし得ないところの思想や筆技や情操を指していふのである。ところがこれ等の人間性による情操についても、その樣子や、物の出來榮について深さと淺

さのあることから繪にも値打が異つて來る。これが繪の見わけ方の鑑賞の値打のつけ方であつて、これによつて繪のよい惡いを見ることが出來る。そこで歪に描いてあるやうな繪でも寫實の繪よりはすぐれてゐるといふやうなことがわかつたり、題意の不明瞭な繪でも立派な美術であるといふやうなことを見わけることが出來る。

筆技、構圖、配色、表現の方法、作者の氣持、作品の持ち味、作者の獨想、かう云つたものの人間性のあらはれたものを見て樂しむものが純粹美術の見方である。

そして作者は常にそれをいろ〳〵の題材や對象（表現し得る材料）を通じて、それ等の自分の力量を示さうとするのである。

そこで美術の鑑賞といふことと、美術の創作といふことが成りたつのであつて、その間に繪を直感で見て、それ等の好き嫌ひを定めるのが繪の見方である。

然しこの見方では素人の鑑賞といふもので、この見方は澤山の繪を見てゐる內に段々に眼が肥えて來て、自然とその繪のよしあしがわかるのである。故に繪をよく見ようとするには結局澤山繪を見なければならぬといふことになるのである。

人間性の有無　然し手取早く繪のよい惡いといふのを見わけるについては、何をいつても、その畫により人間性といふものが現はれてゐるかどうかといふことを見るのが一番である。

繪の値打の深さ淺さは、要するに、この人間性を含んでゐるかゐないかの深さの差によるのである。

同じやうに畫が描かれてゐてもそれが職人的であるか、職人的でないかといふやうなことはこの區別から生じるのである。職人的であるといふのは繪の中でどんなに上手に描かれてゐても人間性が餘り現はれてゐないものを指していはれるのであつて、職人の繪といふものは人間が確かに描いたものであるといふことが知れてゐても、その繪に個性といふものが現はれてゐないものを指していはれるのである。

個性といふのは、その描かれた畫が何の某であるといふことがハツキリわかるやうなことが感じられるものである。つまり個人的な人間性がハツキリと現はれてゐるものである。即ち如何に巧な繪であつてもそれが何の某であるといふことがハツキリ知ることが出來ぬやうな繪であつては値打はないといはれるのである。つまり繪に特徵が必要なのである。

眞實性　特徵があつても畫には又高下の値打の差が出て來る。即ち畫に各〻特徵があればある程その畫は面白いが、それだけでは畫はまだ尊敬されるものにはならない。畫がもつと尊敬されるためにはもつと人間性といふものが必要となるのである。それは何かといふと、個性が人間の生活の眞實にふれて發露されたのでなければならぬといふやうなことがいはれるのであ

る。作りものの個性や特徴では畫は人を樂しませることは出來るが、人々を感動させることは出來ぬのである。

本當の畫といふものは人々を感動させ、その美術は萬人の胸に共感を起させるものでなければならぬといふやうなことがいはれるので、このやうにして、畫は深く味へば味ふ程、その深さ、むづかしさを考へるやうになる。

時代性　しかし、これも時代時代の考へによつて、繪にもいろ〳〵の解釋が違ふので、繪を見てその繪の値打を定めるのには、その繪の見方を知つてゐなければならぬのである。

繪にも題材を第一にした時代もあるし、寫實といふことを第一にした時代もあり、人間的よりも職人的に技術だけを尊重した時代もあるので、一概に定めることは出來ぬが、時代によつて繪の見方を考へる必要がある。

それで手取早くいふと、廣く一般的に萬人の人々にわかるやうな描き方で、物を正確な描き方をするのを客觀的、寫實的といひ、人間性や個人性を尊重した描き方のものを主觀的、個性的といふのである。

〔二七〕の所にある教本の繪は客觀的の繪であつて、この繪の描方では洋風畫の中の印象派といふものの中に含まれるものである。

繪の見方も進んで來ると、その繪の出來榮によつて、その繪が一體何派に屬してゐるかといふことから、大體その繪に示された人格の現はれを見ることが出來る。そこで繪の面白さを知らうとする人は、繪に種々の派のあることを知る必要がある。

一體繪のことを知るには繪に現はれてゐる思想を見ることも必要である。

繪に現はれた思想　フランスのダヴヅドといふ人は美術は享樂ではないとし、そして、美術は知識であると考へた。その次には美術は歴史や理想を描くものではない、我々の生活を描くことである。又現實の眞を描くものであるといふ風にもなつたのである。このやうにして畫を描く人の態度によつていろ〳〵の思想が示されるのである。そこで畫を見てゐると、その思想を見ることで、時代に於ける美術の變遷を知ることが出來る。故に中等學生に對して美術を理解させることは中々むづかしいが、ざつと現在の繪の見方を語つて見ると、次の通りである。然しこれは西洋畫の場合についていふことであるから、東洋畫の場合にはあてはまらぬが、教本二七にある畫を元として說いて見るならば次のことがいはれるのである。

『昔の繪畫といふものは觀念的に物を表現することに慣れてゐたといへるのである。故にその表現する物は作者の觀念を表はすものであつて、一種の觀念を示す文學であつたともいへるのであ

る（このことは現在及び過去の日本畫の場合などにもいへる）。即ち悲哀とか、怒りとか、喜びとか、冒險といつたやうな觀念の表示が美術家の仕事であつたといへるのである。ところがここに示されたやうな畫は、觀念といふものでなくて、視覺の世界を取扱つたもので、繪に題材といふものがなくても繪は繪その物を見ることで値打を定められるものである。

印象派　これは印象派といふものの立場をとつたもので『美術はその姿の第一印象こそ大切である。印象こそ最も眞實である』といふことを示した印象派の考へから描かれた畫である。

印象派といふのは十九世紀の後半期フランスに現はれた繪畫上の新樣式を示すものであつて、自然をば太陽の光によつて示すものである。繪畫といふものを視覺の立場から見たならば、繪畫に觀念や題意といふものは尊重さるべきものでなくて、光こそ大切であるとして物を描く立場をとつたものである。この印象派の立場をとるものは現代の日本の洋畫界には多いので、學生は割合多く見なれてゐるかも知れぬが、全くそれによるのである。故に畫について光とか、色とか空氣の關係とか、遠近の關係といふものを喧しくいふのである。

印象派のことをここに詳しく說くと尙むづかしくなるが、要するに視覺で物を見るといふことを大切にするもので、現在の寫生の方法を指すものである。遠見の櫻の花は雲のやうに見えるし、瞬間に見た場合女の顏からは口唇の赤いところだけしか印象に殘らぬといふものを大切にするのである。しかしこの描き方では作者の人間味といふものよりも、むしろ光といふものを科學的に解釋したものを尊重するので、勢ひそれは誰にでもわかり易い繪となり、寫實を基礎として客觀的な繪となるので、この畫派の次に示された後期印象派の畫に比べては人間味の少いものといはれるのである。

後期印象派　繪畫といふものが視覺を重視してゐる間では、繪畫は客觀的で、繪畫は自然の再現といふものが尊重されるで、作家の個人性や人格といふものから考へられると、繪畫は表現でなければならぬといふことが考へられて出て來たのが後期印象派である。即ちこの派では繪の考へ方を次のやうにしたのである。『繪畫は對象×xでなければならぬ』といふ主觀主義をとつたのである。教本二八圖の中段にある二つはこの代表的なものである。一體物を描くときには作者にはそれ〴〵に各々の考へや思想や性格、情熱の相違がある。それを土臺にすると、一つのものを示すのにも皆違つたものが出來るといふのが、これ等の畫の立場である。そこで各々が異つた表現になつたのである。

後期印象主義といふのは、印象主義が視覺の重心を自然に置いて感覺認識の限界で取扱つてゐたのに對して、反動として起つて來たもので、セザンヌとか教本の圖にあるヴンゴッホとかゴーガンといふ人等から出て來たものである。これ等の人々の畫の特性となつてゐることは主觀的と

いふことと、個性的の表現といふことが著しく目につくのである。

この後期印象主義の畫の出て來た頃から、表現派とか立體派とかいろ〳〵な畫派が出て今日に到つてゐるのである。

その他の諸派　教本にある圖ではミレーの畫は印象派の畫よりも前に出たもので、これは平民畫といはれるものであり、マチスの繪は後期印象主義と略ゝ時季を同じくするもので、單化主義の繪である。

又、その下のピカソの繪は立體派の繪である。

立體派といふのは二十世紀の初頭に起つたフランスを主とする美術の運動によるもので、對象の見方をセザンヌが例示した立體的表現―三延長の實體を二延長畫面で一個の浮彫的に示し、これに黑人の藝術その他の表現形式等によつて、遠近法の力强い表現で物と物との對立を見せる主觀的な物である。故にそこには變歪性の著しいものが見受けられるのである。

かうした有樣で繪には種々な立場が見られるのである。

そしてこれ等の繪のいろ〳〵の立場の相違から各種の派が出來て來る內に、繪その物の考へからして變つて來て、元來美術とは實用には供せぬと考へられてゐたものが、美術にも實用的なことを試みることが本當であるといふやうな考へから、產業美術とか、實用の美術といふやうな考へが出來、商業美術といふものが生れるやうになつたのである。故に商業美術といふものは最も尖端的な美術であるといふことが出來るのである。このことに關して詳しいことは、筆者の著「構成原理」（高陽書院發行）やその他にも書いてある故、それを一讀されんことを望むことにして、ここでは餘り長くなる故省略して置くことにする。

兎に角、學生には美術といふことを理解させることも情操教育上に必要であるといふことを附加へて筆を擱く。

商業美術教本入門用解說　終

昭和十三年六月十五日印刷
昭和十三年六月十八日發行

【非賣品】

商業美術教本
入門用解說

著者　濱田增治
發行者　合資會社　富山房　東京市神田區神保町一丁目三番地
代表者　坂本嘉治馬
印刷者　合資會社　秀英社　東京市神田區小川町二丁目十二番地

發行所　合資會社　富山房
東京市神田區神保町一丁目三番地
電話神田三七二二番　振替口座東京五〇一番

終